

郎 路 生 麻・幹 主

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和五年十月一日發刊（每月一回一日發行）

川 柳 雜 誌

川 柳 雜 誌 社 發 行

川柳雜誌

號十第 卷七第

號 月 拾

清 酒

句の秋・酒の秋

白鶴をチントンシャンミ提けて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君こ僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝
く
美
髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

——創作——

近川

柳

作.....麻生路郎(四)

水谷 鮎美

福田山雨樓

朝田 新水

出口 雨町

松丘 町二

伊藤綠之助

住田 亂耽

伊藤 愚陀

松盛 琴人

中島 鐵洲

岩崎 柳路

橋本 綠雨

阿部 閑生

中見 光路

木山青砂郎

日野 華水

永田里十九

丸山 公二

平井 蒼太

田中 紫浪

西村 市公

池田 雪峰

須崎 豆秋

中澤 濁水

桑原 京郎

櫻井 圓角

生田 翠夢

集.....(九)

前田 五健

富士野鞍馬

長崎 柳秀

蛭子 省二

耀

抄.....(三)

スエノ

吟女 誼子 房子 縊子

(三)

作 柳

樽.....路 郎 選(一〇)

同

.....ひろし 選(三)

——一路集(募集句)——

.....蛭子省二選(三)

命.....高橋かほる選(三)

圖.....住田亂耽共選(四〇)

.....友淵貴山(四七)

川

柳書架(四二)

.....(四七)

地

.....

運

.....

秋

.....

文苑

竹馬居雜筆(八).....蛭子省二(五)
主觀句の研究(五).....福田山雨樓(六)
月卓を圍んで.....路那紋太ひろし(三六)
評卓を圍んで.....山雨樓琴人町二(三六)
旅の心.....麻生路郎(三三)
BUILDING.....(四三)

けは.....伊藤愚陀
言は.....出口雨町
名譽毀損.....西田浪人街
歩みつゝ(その一).....水谷鮎美
地球の一の色.....尾崎海洋人
萬病一喧嘩.....大久保大夢子
夫婦喧嘩.....松盛琴人
ベンなき詩人.....關本雅幽
切符の行街.....日野華水
無題.....河野双車
アツパツ.....越中今雨
何かなるだらう.....丸山公二
續川柳家戸籍調.....福田山雨樓(三七)
句會の横顔.....福田山雨樓(三七)
編輯後記其他.....朝田新水(四二)
杭全町メ.....綠雨郎生(三五)
各地柳寶.....(三八)
柳珍堂忌.....山雨樓記(四八)



近作

麻生路郎

手を貸せば人間並な口を利く
お互ひがみな病院にゐるさも知らず
バット級君も芝居をしてるのか
青バス銀バス河岸の巡查よ
一心寺にて

父を求め子を求めたり骨佛
未亡人の視野に甲乙丙丁戊
乾イズム先づ情熱を棄てなさい
ピアノが鳴つた金借りに行け



竹馬居雜筆

蛭子省 二

(十四) 川柳・源氏物語——(川柳雜誌社同人に望む)

古川柳の研究は、驚く程進歩はした。詩的検討は別個としてこれを分類し、これを解説する上に。近時、純川柳家外の識者、讀者の努力に俟つものが多くなつたのは、見逃し得ない事實である。夫れだけ川柳の尊さが、一般普遍化したのだと言つて了へば、川柳家はいゝ氣になつて居られようが、或は寧ろ川柳家が、古難句に對し齒が立ち兼ねて、高樓につかねて置くうちに學者達が片手間に調理して呉れるのであるならば、私共は餘りにも、自分の責務に忠實ならざるを恥ねばならぬ。と同時に、學者達へ多大の感謝を表する、帽をも執らねばならなくなる。川柳家で古句を毎日みて居る人々は、多くは、最早相應な御年配で、孫持のお方もある。さうしても二代三代の業を繼ぐ、後進者の簇出を希念せねばならぬ。殊に本誌を中心とする大阪地方からは、地の利をもて其趣味を一層涵養して頂きたい。隠

れたる識者は知らず、今日まで本誌御同人中からは、其方面に餘り人を出してゐない。實に七年の歴史を有する柳壇つ切ての一流誌ではないか。さうして作句本位のみの片手落ちになつたものか、古柳書が手に入りにくかつたなさは、理由にもならず寫本する程の熱心があるべきであり——私共は専ら活版本主義ではある——のみか、ズット古くは、關西川柳社が樹立された時は、大阪には立派に手近に古柳書が揃つてゐた。それに因つて『川柳源平物語』も『川柳江戸砂子』も生れたのである。又作句以下に見做したさいふにあるなれば、詩的一隻眼がなかつたのだとも評し去られよう。車の兩輪の如く進めてこそ、つきせぬ川柳詩味、川柳詩恵に浴し得るのである。私の如きは、元弱體であり無學であり、物の數には入らぬけれ共、研究心を失はぬ丈の覺悟を以て、同志の仲間入りをし、一つでも二つでも難句に苦勞する歡喜をもつのである。大阪中心で殊に本社御

同人中の若き篤學の士により、古句研究に一臂の勞を捧けらるるを望む。

曩に學者により川柳徒然草研究が、遺憾なく遂げられた。私は川柳方丈記を目ざして、其の收覧の餘りに少ないのに驚いた。いかに見落しがあるにしても、古川柳家には方丈記は更に愛讀せられなかつたのであらう。爰に中平(悦庵)教授により『川柳源氏物語』が、柳樹研究誌上昨年八月から此の五月迄、回を重ねる八度にして、あの九十四帳に亘る、日本否東洋最古の長篇小説が組上された事は、痛快に覺ゆるに俱に、教授の貢獻を讃仰する。實は私は完了の上一氣に讀みた、其の二々の配本に際し目を通さなかつた。初伏の日より餘りにも蒸暑く、身の置き處もなかつたので、熱時讀殺の心組で『川柳源氏物語』を味讀した。三百五十數句を順序立てられたもの、一卷毎に梗概も附してある。

『川柳』に見える源氏物語の句を洞觀するに、物語を精讀しなくとも作られるやうなのが大部分を占めてゐる。此の點から臆測して、江戸人の源氏物語に關する知識は、物語以外のものから間接に得來つた常識であつたに斷じてよいかと思ふ。『三筆』に述べたのであるが、確かに名句は少なく、薄ッぺらなものが多い。十六番の謡曲等に影響されたのは明か、お手帳にその邊から引張出す傾向は、他からも察せらる。今日の若い川柳家中

にも、失禮な申分ではあるが、源氏物語を讀むてゐない人の方が多からうと思はれる統計は持つて居る。諺にも三月庭訓、公治長論語、須磨源氏なき云ふ程、かなり讀みづらい、油汗を流してかからねば、急いでは通讀だも出來ぬので、古川柳家も御多分に漏れなかつたかも知れぬ。然し源氏物語の焼直し模倣で大成功した、修紫田舎源氏の著者柳亭種彦は、木卯先生として川柳作家であり選者であつた事は面白い關係ではあるまいか。

餅は餅屋といふ。川柳は川柳家が詳しいのは當然な事であるが、その餅屋にも部分的に専門家の技術知識は借らねばならぬ。私共川柳全般に亘つて見通しをつけねばならぬヨロツ屋であるけれど、例へば國文學專家には及ばぬものが多い、即ち源氏物語に關しては、中平教授の研究はしてゐないので、その道の學者から指導を受けるは、非常に裨益するのである。然し夫れは足らぬ處を學ぶので、全然無知識であつてはならぬ。私も川柳源氏物語を知つて置きたい。若干句を手帳に留めた事がある。で中平教授の三百數十句中に見當らなかつたものだけを、ホンノ少しではあるが發表してみよう。——(或は私の見誤りで發表済のものがあるやうな事があるかもしれぬ。注意は拂つたのであるが)——原句との相違もあるであらう。いづれは後日補校するとして、只句を列べた丈では讀者の興

味もいかゞかこ、いらざの贅註を添えた事は寛恕されたい。

(雜) 五十四をかいて三十六におち

三十六歌仙

五十四を三十三の中で書き

石山寺は西國札所第三十三番

石山の所化衆短冊なごねたり

石山には源氏の問が違つて居る

こんのいい官女まほめる蜆取

瀬田の蜆は名産(和漢三方圖會)。瀬田の蜆汁は醬油をすま

し吸物なり、鹽梅またくらふべからず(羈旅漫錄)、石山の

柳屋は有名である。

六十帖も紙のいる物語

あだつきを六十冊に書上げる

五十四帖なれど大凡六十帖と云ふ、源氏供養にも「我石山

に籠り源氏六十帖を書記し」

徒附き、あだ心を起す事

六十のうち虫けらが五六疋

源氏供養には巻名がよみ込まれてゐる、鈴虫の巻とか螢の

巻さか

紫の硯もこぼる比叡おろし

眠氣を去らずビワをみて書いた文

源氏物語ビワでしらべてる

石山の誓願寺の寺はいり

誓願寺なる謡曲あり、京寺町三條下町に在

日本紀の局唐にもない作者

日本紀の局操は一本木

紫式部日記参照「海人のくくつ」に、紫式部が事をかの日記

によりて日本紀の御局とかく人あるはよろしくもあらじと

ぞ思はるる。かの日記なるは一條院の北人は日本紀をこそ

(常木)唐崎の景色でかいた品定め

雨夜の品定めは有名な話

雨の降る晩に女のお店おろし

『女もえをさめぬ筋にて指ひみつを引き寄せてくひて侍りしを

おきろおきろしくかこちて、かゝる疵さへつきぬれば』云々の

指喰女の句が一つも掲げてなかつたが

指喰女川舎源氏もよめぬ妻

嫁無筆源氏歌留多に指喰女

餘の作者川舎源氏に指喰男

(空蟬)秋中は頃空蟬の巻をかき

空蟬のきて抱付いた伊豫簾

伊豫介にかく。伊豫介は空蟬と共に十月任國へ下る、源氏

は色々贈物をして居る。

雲の下へは空蟬の函を入れ

空蟬の床ははききの苦勞なり

源氏が空蟬の床へ侵入した時は、もねけのからであつた。

(夕顔)夕顔をほめれば恥ぢて宿かさず

夕顔の咲く家の女はその花の如く美しかつた。

横に車を夕顔の軒へこめ

光君糸瓜の宿はぶらつかず

夕顔を御報謝いふやうな公家
夕顔へこれみつゝの御伴なり

惟光は大貳乳母の子。香をたきこめた白扇に夕顔を上せて
出したので惟光はそを源氏に差上げた。

(若菜)五の巻は新造買さ光る君

(葵)葵から先づ書きそな物語

がさつなは葵のうへのさねりなり

加茂葵祭の時葵上の舎人は六條御息所の車をたたきこはし
た。

うきねすら恨は加茂の祭から

破れ車つれなき人にあふひ草

新道で葵の舎人のびをする

不甲斐ないみやすぎころの舎人なり

京都六條京極に住み給ひし故六條御息所の名あり、光源氏
の伯父にあたる皇子の御臺所

中平教授は「江戸人が源氏物語を精讀してゐたものさすれば、

夕顔をさりと殺し 葵上に 禍した御息所の嫉妬深い執念さ乃至

はその生靈の怪異さに就て、何か句があつたに違ひないと思ふ

」と、陳べて居らるるが、よし源語を精讀せずするも、諸曲

「葵上」は同事件を取扱つたものだから、古人がこれを讀

まなかつたことは思へぬ。——文句取吟なきはあるから——只私

も未だ句を發見せぬのは遺憾ではある。

(明石)胸をあかしの入道の親切さ

明石入道は若菜、須磨の卷等にも出てくる。入道の娘に明

石上があつて光源氏が須磨に左遷のおり、契りて一子さへ

ある。

いし／＼をたべて明石へ書きかかり

(薄雲)十九帖目をよみかけて床につき

(朝顔)書頭は式部三千代にかくれ咲き

朝顔と夕顔の巻はある、書頭の巻はない。

(螢)晝はねて夜は螢の兵部卿

螢兵部卿宮は若菜、幻、繪合、梅枝等にも出てくる人

(初音)法華經のうらへ初音の巻をかき

(若菜)五十四へ二把たばねこむ紫菜

若菜の巻は上下あり

小倉で一把石山で二把たばね

柏木は猫大明神三國でいひ

が簾を上げたのでお姿をみるを得た。

爪のあみだらけ女三の御手箆笥

檜扇の房で小猫を御寵愛

藥玉の糸に女三の猫はじやれ

藥玉の事は東北川柳七月號拙稿参照

右衛門流しの鞠へきて猫はじやれ

にやア／＼と鳴いたで鞠が極不出來

何時だ女三の宮に聞いてきな

箱入りの若菜の巻も出がつき

二人迄若菜をつけて宮仕入れ

(御法)讀經のそばでみのりの巻をかき

(浮舟)浮舟へわき艦にはほふ兵部卿

浮舟のおもひぢちらも三會目

薰中將さ匂兵部卿

(夢)の浮橋 煩惱も悟つて紫女も夢でこめ

机から草紙のすべる書きしまひ

(雪隠)惜むべき光は消えて雲かくれ

源氏の書つまり／＼は雲でにけ

一帖は月でかいても雲がくれ
中平氏採用のものと中七上五が入れ違ふ

此外の句は次回に譲らう。近時金子元臣先生が、吉澤義則博士の講義等蒐大成した源語關係の名著もあり、容易に手に入るのだから、お互に研究してみたい。古來源語位各種の参書があるものもない。

(追記) 本稿は初伏の日に走り書きしたもので、發表にはかなり

粒々集

○ 松山 前田 五健

可笑さをこらへ宣傳派手・かき
髯が邪魔らしくトマトに忙がしい
蟹が這ふこゝ海水の臨時驛
乳離れの呑むけて寝る兒の淋し
手傳ひを手違ひにせぬヒステリー
九月七日飛行機上 (三句)

鳥瞰に初三郎の給が奔る
一命を任して空の秋に觸れ
これだけの家へ生きねばならぬ人
○ 東京 富士野鞍馬

はきくゝこして女事務にくまれる
ためて居る噂大阪から來た女給
雞の水呑む型で按摩來る
女事務戀は別な甘えよう

躊躇した。又いつ之れが本誌に活字になるのが、随分遅れるであらうと察する。而して八月末に新聞の廣告で岡田博士等の新著『謡曲三川柳』の出た事を知つた。十六番の謡曲が源氏物語を材として居るからには、新著に於て尤も詳に研究済と思ふけれど、私は今其本をみるを得ない。兎も角送稿して取捨を編輯者に委ね、誌面の不名譽にならぬ様お取なしを願つて置く (八月二十九日)

紙芝居しかこ子供の氣をこらへ
手の筋へ舞鼓小首をかしけてる

○ 御影 長崎 柳秀

人さんにつこめ利發な妻となり
きの部屋も見さうしにする留守居番
ほん踊り姉と妹がすれ違ひ
なんのかの云へき女房出好きなり
十五夜の月の圓さに吾れを省る
口先きこ知らず女に金をつぎ
蹴られても添乳は足を嬉しがり

○ 朝鮮 蛭子 省二

虫のなく晝お賽錢二度になけ
萩が散り月をはだしで踏むでみる
糸瓜雨にのび説教日の鼻緒すけ



人妻MなKつて憎くも眼を避けず
 みだ▲ら女子の鼻の脂肪よ
 欺されはせざりし誇よさみしさよ
 還浅へ女三人手をつなぎ
 片づいた家が淋しい避暑の留守
 運命の判断さいいふ御商賣
 しんぞうへ生活さいいふ重荷かな
 蠶では喰へぬ便りが國から來
 夕立によれ、草のよみがへり
 白靴の輕さ女房を先に立て
 ぬらぐさ嘘つく暇のビール瓶
 改札のも一度見たい顔が過ぎ
 儲からぬ汗を流して淋しがり
 これ程に頭を下けて値切られる
 人の氣も知らずに女笑ひこけ
 一生をまかす垣根は倒れてる
 失業の趣味はラヂオへ立ちつくし

同	大阪	同	龍田	同	神戸	同	大阪	同	別府	同	大阪	同	東京	同	同	島根
同	黒天	同	翠峯	同	一鴉	同	二竹	同	兎卓	同	露斗	同	佐保	同	同	龍村



妻 子 よ さ ら ば 朝 顔 も 咲 け
さ も す れ ば ハ ン マ の 力 い び つ に し
ス ビ ー ド の 一 人 位 は 慓 く 氣 な り
物 質 に 恵 ま れ て 子 の 脊 虫 な り
ハ イ ハ イ ミ ば か り が 妻 で な い も の を
こ ん な 兒 が あ る の に 戀 を 忘 れ か ね
童 心 に 返 る の も よ し 秋 祭
秘 訣 教 へ て く れ ミ ひ や か す
未 亡 人 あ ま り に 打 算 的 な 戀
失 業 へ 氷 の や う な 女 な り
さ つ き か ら 人 の つ も り で る た 案 山 子
落 雷 の 後 弟 が ヘ ソ 出 し て 立 つ て
せ め て 死 ぬ 時 だ け 靜 か に し て お く れ
悔 い 改 め た 者 に も 仕 事 見 つ か ら す
娘 る だ け が は し や ぎ ぬ 山 小 屋 で
雨 上 り 山 か ら 山 へ 笑 ひ た し
若 狹 高 濱 情 緒
ポ ー ト の 灯 高 濱 小 唄 へ ゆ れ て る
獨 り 身 の 終 り の 夏 を 病 ん で る

若狹高濱情緒

大守	朝	松	大	金	大	道	愛	長	大	神	三	島	大	同	鳥	同
阪口	鮮	本	阪	澤	阪	後	媛	崎	阪	戸	島	根	阪		取	
没あ	如	ら	五	木	海	計	空	可	櫻	三	素	濱	桂	同	湖	同
食き		つ	郎	偶	洋											
子ら	空	ぱ	八	人	人	加	山	醉	果	霞	萌	郎	枝		山	



反抗のさて大陸をさう行かう
 病院で草履へらぬも憐れなり
 鮮人ミ知つた家主の慌てやう
 彼女に
 橋立に立つ影君を想ふ影
 紹介所ものにも成らず雨に遇ひ
 光に酔つたつまし村だ
 美しくしい心で居れば食ひはぐれ
 労働爭議
 検束されてゆくのを蜥蜴が見てる
 角帽をみんな哀れな眼で眺め
 弱さかくすに怒つても見る
 歸省なりや旅行なりや思ひけり
 久々に寝轉ぶだけの姉が来る
 死を考へる戀なんて馬鹿にされ
 戀愛はまかりならぬミ施療院
 西瓜畑月が見てるぞ見てゐるぞ
 失業のせめて洗濯なミしよ
 サーベルの音がつめたい座食の身
 單調な海岸線よ肺を病み

鳥取 釜ヶ池 大阪 宮津 大坂 金澤 愛知
 大坂 名古屋 大坂 石川 大阪 明石 堺 釜ヶ池 釜ヶ池 名古屋 大坂 平塚

暢山 銀花 菊路 トシナ 南牧 今雨 青笛 苦香 黄葉 吉祥 了念 英三 奈緒 芳美 草石 捨男 城月



主觀句の研究

(五)

福田山雨樓

つ生み得るからであるこ答へる。

恐らく、子供を愛する所以も亦同様な心理經過を辿るもので子供を愛するが故に子供を生み、子供を生み得たから子供を愛し之を養育するのであらうと思ふ。

川柳を味はひ且つ生み得るから川柳を愛し、川柳を愛するから川柳を生む循環論法が、川柳人によつて生命づけられてゐる間、川柳人が川柳に引ずられることは、蓋し當然の歸結でなければならぬ。

而して、川柳を生み得るに至るプロセスには、少くとも二つの前哨戦があると思ふ。その一つは川柳味の吸集慾であり。他の一つは川柳味の表現慾である。川柳味の吸集慾は即ち川柳のバイブル、柳樹によつて植付けられ且つ成育されて來たのであ

自分が川柳創作の態度に於て、純藝術的な作句衝動の自覺の上に立つて居り乍ら、尙且つ心のふるさこして古川柳の齎した、云はゞ興味本位に近い句作精神を捨て去り得ない所以のものは、單なる句作的興味に引きずられてゐるからではないので、川柳そのものに引きずられてゐるからである云ひたい。しかも、川柳人である限りに於て、斯様に引きづられてゆくのは敢て差支ないのみならず、寧ろそうした姿にそほんさうの川柳人であると思ふ。

一體われ／＼川柳人は何が故に川柳を作り、川柳を愛するのであらうか。自分を以て云はしむるならば、川柳を愛するが故に川柳を生むのであり、川柳を生むが故に川柳を愛するのである。では何故川柳を愛し得るか云ふならば、川柳の味はひ且

る。尤も川柳味云ふものは柄井川柳翁の發見創造にかゝるものでなく、又吳陵軒可有の價值判斷にその決定權を委任したものでないが、大概の川柳人が始めて川柳に這入る場合、柳樽を手引してゐるので代表的にかく見做したまふである。云はゞ心のふるさこの氏神として、柳樽の存在は飽くまでもわれわれの川柳味吸集慾を使唆せずにはおかなかつたのである。吸集慾を満喫した川柳味は轉じて之を表現慾に移されることは疑ひを差し挿む餘地なくに肯けることであらうと思ふ。汽車のスピードを始めて知つたものがこれに乗つて見たいと思ふ欲望と同じやうに、興味云ふ言葉では覆ひきれない生命感である。

斯くして一路川柳創作のよろこびを辿つて來たわれわれは、川柳を創作することによつて自己の生活をより豊かに深め、純化して來たものであるが、又一面、純正なる川柳詩を創作しやうとすればするほゞ、川柳の句作が、必然的に素材難と表現苦を伴ふものであり、ひいてはその素材難並に表現苦を回避する爲めに句を作りつ放す場合が尠くない事實を否定出來ないし、又この事實の前を無反省に通じ越すことのあり勝ちなのをしまゝ味はつてゐるのである。この素材難や表現苦への眞剣な悩みを背負ふ毎に、これを切り抜けるべく句と心の洗練に精進の鞭を振り上げないわけには行かない。練られた心境練られた主

観に依つて、練られた句の表現を希求して止まない。この事は川柳家としての純一なる修行であり最後の満足であるべき筈のものであるが、事實に於て、寂寥と高踏の高い牆壁から、もうくも追ひ返される場合が多いのである。しかも自分の場合では川柳道場への體驗を積むに従つてこの受難の回數が増して來たことを告白する。

そうした場合に、心のふるさとはいもにこやかな慈愛の笑みを湛えて、われ等をその懷の中へ呼び入れて呉れずにはおかない、全くふるさは招くのだ。この慈愛の前には一たまりもなく、總てをかなぐり捨て、飛び込まずには居られない。……恰度夏の子供が眞ッ裸になつて海へ飛び込むやうに……しかも心のふるさこへ歸る心持ちは、決して都會から敗殘の破れ衣で故郷へ落ち延びる淋しさはなく、樂しき夏休みの一月餘を父母、膝下へ、郷土の山河へ呼びかける軽い明るい喜びの姿である。動機には幾分退嬰的なものが含まれてゐるかも知れぬが、決して退却そのものではない。或る意味に於ては、複雑から單純へ歸るのであり、高雅から稚拙を振り回くのである。盛裝から素ッ裸になるのであるとも云へる。こうした解脱的な心持ちは、特に川柳云ふ選ばれた文學のみが、専有するものであるとは云はないけれども、川柳に一番相應はしい横顔を見せたものであると思ふ。

われ等は、一方に於て、飽く迄主觀の高潮を叫び、主觀句の尊さの前に拜跪するものであり乍ら、尙且つ古川柳の齎した心のふるさを忘れぬ所以の一方面を意識したのであるが、今一つ古川柳の齎した魅力の窓を覗いて見たいと思ふ。それは、柳樽に於ける優れた藝術味に付てある。

ふるさとへ廻る六部は氣のよはり

道間へば一度に動く田植笠

牛かたのあきだめて行く俄雨

盃をさせば三太線杖につき

添乳して棚に歸が御座りやす

すりこ木の鏡へうつる新世帯

百兩をほごけば人をぢらさせる

泣く時の櫛は炬燵を越して落ち

柱にも少し葉のある旅芝居

石屋にも一ツか二ツ繪具皿

はたし狀泣くな泣くなと墨をすり

男の子はだかにするとつかまらず

押へればすゝきはなせばきりぎりす

月へ投げ草へ捨てたる踊の手

團扇では憎らしい程たゝかれす

提灯の埃片足庭へ降り

うつむいて叱られ振りのいゝ女房

松原の茶屋はいぶるが景になり

ことづかるふみでほゝなごなで見る

長話とんぼのとまる槍の先

例句をすべく餘りに人口に膾炙した句ではあるが、これ等の句が齎す素材並に表現のうまさ、それは一口に穿ちださか、

可笑味、輕味、機智、諷刺、皮肉等々の單語を以てけなし終すこの出来ない、藝術的意義素の豐饒さを味到さすものがあると思ふ。僅か二十字音に足らぬ簡潔な詩形を以て言葉のありさあらゆる撰擇と精粹を極めた表現體が、非常な迫力と光茫をひびき、直ちに人間性の真ん中へ切結ぶ大刀風がすきでたまらぬのである。これがそもく川柳のすきになつた、川柳に戀した端緒であることを偽るわけにはゆかない。そして表現の進展に伴つて幼稚な作意は次第に薄らいで來たが、川柳の持つべき切れ味(迫力)には、いつも砥石にかけける用意を忘れてはならないのである。若し獨斷的な言葉が許されるならば、川柳が藝術としての價值量の大半は、そのユーモラスな素材の提供に、優れた切れ味(迫力)の如何に歸すべきものである。でなければ、川柳が川柳としての獨自の存在を必然的に主張する理由が乏しくなつてくるまい。

尤も川柳のもつ切れ味(迫力)に付いても二様の見方がある。曾て川柳雜誌第六卷第十一號で路那氏がのべられた「鋭角の句と鈍角の句」がそれで、恰も三角形に於ける頂點と底邊にも類するやうな場合がある。句の裏に當る底邊の兩端の角度は鈍であるものでも、外部に表れた頂點はそれに反比例して尖鋭なものあれば、頂點は一見鈍であつても、その底邊の兩角度は尖鋭なものを藏してゐるものがある。何れにしても正しき鑑賞の鏡に照して、川柳の鋭き切れ味(迫力)たるを失ふものではな

く、共に同架してその價值を問はるべきものであると思ふ。

これだけ言つたのでは、叙上の如き二元的な境地に彷徨する作句態度、即ち純な藝術意識に目覺て居りながら一方に於て古川柳のふるささを忘れぬ未練姿を否定し切らない理由の答辯にはならないけれども、落付いて考へて見るならば、そもそも多元的な歩みを否して、一元におさまり返らねば氣のすまぬ云ふ考へ方は、大變窮屈であり不自由であらうに思はれる。早い話が吾々の食欲衝動これは可なり眞剣な働きの上に立つてゐるものだが如何に多元的なこゝか、殆ど自己を疑ふほどの多種多様な觸覺をもつて、好餌を漁るものである。それをいやう、ごんやそばは下品だから見向いてはならぬ、麥飯は見つこないなごゝ、特定人の嗜好習癖から強要或は制限されるごしたら、ごんなにわれゝは窮屈を感じ、不自由を忍ばねばならぬかわからぬ。これは主義や好惡の尺度でもつて、他人に迄容喙してはならぬ本能地帯に屬するものであるからだ。

川柳味の探究、吸集乃至表現に就ても略同様のこゝが言はれるのであつて、或る一つのイズムを楯にしこれを根城のやうに固守してその中から一步も外へ出ないやうな偏見は感心出来な

いと思ふ。

苟くも川柳創作である限り、川柳味を觸發する價值感情の抽出には當然全我的であるべき筈である。山に登るもよし、川に遊ぶも可、家庭に街頭に、人事に自然に川柳人の觀照は毫も拘束される理由はないのである。二元でも三元でも構はぬ、もつ

ごとく自由に卒直に表現し得る母體であればよいのだ。

こうした考へ方に生きるのが、ごんなに視野を廣くし、表現を自由にすることは云ふかは云ふ迄もないことである。この考へ方に救はれるごに依つて川柳人は如何にのんびり汎く宇宙に、人生に對抗して行けるごか思つて見ても闊達の域に迄行進するの愉快さが湧いてくるではないか。

しかし多元的な歩み方を拒まぬから云つて、詩としての川柳に無關心であつてもいい云ふのでは決してない。詩に反逆する川柳は雜草のそのの如く繁茂して容易に刈り盡すべくもないであらうが、それはご迄も區別し押しつけてからねばならぬごは造次顧みず雖も忘れられないのである。そしてこの考へは、目覺めたる川柳人として共同戰線に立つものゝ、根本且つ絶対のいましめであらねばならぬ。

そこで自分は、本稿の結末を締め括らなければならぬごになつてきた。

吾等は以上の如く思索の清算を試みるごよつて『川柳が川柳である前に詩であらねばならぬ』の命題はわれ等の歩みを力付けてくれるものでこそあれ決して川柳を窮屈に壓縮するものではないごに氣付くのである。古川柳が贅した川柳味を堅實に把握し更に洗練せられたる川柳味の觸發によつておのが主觀精神を擴充して行くならば窮屈ごるか、却つて圓融無碍なる藝術の圓光を具現する域に達するごが出来るのである。この全我的な自由境に徹する藝術的精進にあるなれば、そ

ここに始めてわれは、古の萬葉人にも、一茶にも、良寛にも、芭蕉、蕪村、啄木、菴哉、子規、六厘坊、青明、柳珍堂にも、現在のあらゆる短詩壇の人々と共に、魂の交流を楽しむことが出来るのではなからうか。

これからの時代には次第に集團的な藝術が要求せらるゝであらう云はれてゐる。川柳人は、俳句に於ける芭蕉や子規の如き不出世の英才の出現を待望する前に、お互ひの川柳だ、お互ひが仲よく手をつなぎ合つて、共に研究し精進の歩調を揃へて川柳の歴史を書き替へる意氣と根氣を續けたいものだと思ふ。既往を否定し去る前に既往を、肯定の土臺として進まねばならぬ。詩的精神のない川柳は頭から抹殺しやう云ふのではなくて詩的精神のこもる様にお互ひで訓練し合つて行かう云ふのである。川柳をつくるからには詩的精神のこもつた川柳をつくれ、そのことが川柳をよりよくする所以である。川柳創作の態度の上から主観句への研究を進めるのであつて、主観の色彩が濃厚な句ばかり作ることを主張するものでないことも明かにしておきたい。

主観句の研究に付ては、句そのものゝ打診的検討や、淋し、悲し、嬉しとか云ふやうな句語の事等、まだ調べて見なければならぬ。こゝが澤山あるが、初めの書き出しが恐ろしく堅くなつたので、今更文章の構成上それを試みることも變になつてきた。また筆硯を更めて書いて見たいと思ふ。(終)

樂

燒

黄金千す穂の中に簾一ツ

皆様の
記念に
贈物に
趣味に

御揮毫をお奨めいたします

一樂は

大阪市住吉區牛野流町

尖端の風

翠香園

吹かぬミコ

路郎

窯元

一樂

川柳塔

□
□
□

水谷 鮎美

水すまし僕のこゝろへ舞ふてゐる
片頬にばかり接吻されてゐる
水薬 それ 赤さんほ 赤さんほ
いちゞくの味にさびしき父さんほ
お醬油の味や さびしき秋の風
灯を消せは秋は流れてしまふなり
ほてかづら油ぬけして秋深し
酒のみになつた秋の手紙が來

日向葵へ通勤力なく戻り
○ 福田山雨樓



心配ばかりかけたねえ夏帽子
路郎師へ

にがりきつても師は燃えてゐる
俗物になりきつてゐた煽風機
別嬪の齒に惜しや惡聲
馬の尻尾がチョン切つてある
頭の中にも青きいれずみ
みなすつこ立つ葱畑へ落付かう

○ 朝田新水
スピードよ今來た金が飛んで行く
かすり疵はや戀人の眼にこまり

就職のはや一日を終りけり
 地味だとは心が言はせ眼が云はせ
 夫ある身が三疊の間借こは
 秋の夜の遅い歸りを待つてくれ
 女房の心盡しが綱かな
 食欲にひけめはさらぬ妻若し

○ 出口 雨町

俺の血はぎこまで續く人類史
 鏡見てひよい舌なご出してみる
 淋しさに女を連れて歩いてみ
 あゝ生活の焦點が欲し

工場風景 (三句)

お便所へ行くにも持場たのんぎき
 贅澤なものが女工の手から出来
 卑屈にも爭議を逃けてお茶屋に
 失業者子に慕はれるのがつらく
 失職をしてからもよい父であり
 まだ金があるで次へ呑みに行き
 見るひまもないに朝顔なご咲かせ
 カーテンはだらり垂れて氣も重く
 何處からかお七が笑ふやうな夜

險惡な空ごはなりぬポブラかな

庄 萬よし君

まづ店の方へ萬よし歸つて來
 相場にもよく運のない男
 寢姿はたゞ善人ごしか見えす
 下駄になる桐ミ箆筒になる桐ミ
 職人の子供に負けて叱られる
 大阪の空では月も忘れられ

○ 松丘 町二

藥代のツケは丸めて粟を買ふ
 その日暮しを玉振時計がうなづくよ
 秒針の孤獨に遠き稻妻や
 わが影を啄んでみる雀哀し
 激情の火ミなる指にピアノ鳴る
 愛の巢にあゝわが生命腐りゆく

○ 伊藤 緑之助

ですけれご餘りかまはぬ父の聲
 コロ／＼母娘大八曳いてゆく

○ 住田 亂耽

圓タクの汚ない方へ乗つてやり
 町瞰れば女なよく秋の坂

月の圓さへ長い鉢を手にかざし

Hへ奥ふ

結構な話養子の口があり
將棋で言へば歩兵の如くに扱はれ

○

伊藤 愚陀

白き感じを襟に抱きて夫の留守
探してた夜は白粉瓶にゐたのよ
風の夜の戀を樂しむ睦かな
馬鹿氣たKISSよPICTUREじゃありな

○

松盛 琴人

ごたくミ世帶道具の中に生き
俺さいふ奴はドンキホーテなり
子を産むだけにされてはモガイズム
泳ぐ氣の胸の深さへ波を受け
籠拔に遭つて素行を叱られる

○

中島 鐵洲

すぐ次に贈つて淋し貰ひ物
ためらひもなく糸瓜の延びるこ
まこまつた無心それから別れる氣
デパートに尼僧の姿見受けたり

孟蘭盆會 (二切)

瀬に乗つた燈籠に妻は手を合せ
燈籠流し戻れば葛湯入れてくれ

○

岩崎 柳路

水銀のやうに風ぎたり月の海
工場の火事にお稻荷さんも焼け
谷崎夫妻へ矯風會又怒り

○

橋本 綠雨

日射の裏に朝顔のもつれあひ
戸をたたくミ松蟲の聲がやむ
咲き揃ふた花に居残りが續く
御用きミ戸の入替へを手傳へり
意見するこども控へ目こはなりぬ
君の失業も笑えぬ日が來やう
子を連れて行けばバツタもイナゴもる

鶴峯君の令息を悼む

父も母も探しあてずに淨土の灯

◇

阿部 閑生

おくり出て心もさない女醫者
ゆきかひの雲の急なる藥取り
淋しさの日もすがらなる坐り蛸
大おでこ小おでこならべ天瓜粉

追つて来て問はぬに醫者は淋しがり
賣り家ミ表に張つて住んでをり
露の宿牛乳の蟻置いてあり
轢死者に夕焼空のひろがりて
野を焼く煙ミ人を焼く煙
奥さまの蚤をこる手の神秘めき

◇

中 見 光 路

子に聞けばうちが一番よいころ
妻君があるばかりに馬鹿な面
秋風につひ懐へ手がはいり
しばらくは世間はづして丸裸
頬ばつたあの子この子の箸のさき

◇

木 山 青 砂 郎

もうけてた頃を思ふた長襦袢
よくしやべる女の脊のまんまるく
戀の力ミ酒の力の中に居る
極端に愛してゐるをなぜ笑ふ
結局はチツプの欲しい眼なりけり

◇

日 野 華 水

眞つ裸きちらが客か碁を圍み
山の朝靜かな池に蛙の子

竹があり八つ手があつて戀の青さよ

◇

永 田 里 十 九

三度目は間違ひのない戀になり

◇

丸 山 公 二

身の爲ミ苦勞なぐさめられるなり
雄圖抱けばせまき日本よ
血をわけた者ミ思へぬ別れかた
貞操の乏しそなる眉をひき
沈み居る女の息のやはらかな
事金で濟ます心のくやしけれ

◇

平 井 蒼 太

廁にて獨り笑ひの消えやらぬ
男娼の二人三人に魅せられぬ
日焼けせる君がみあしにくちげん

◇

田 中 紫 浪

十錢のカツをはるぐ食ひに行く

◇

西 村 明 珠

起き抜けの子供に新らの本があり
町方の子供が來たきたかられる
怒つてゐる父のそらに何もなし
正妻に直る日のある嬉しさに

笑はせておいて少々願ひ事

◇ 池田 雪峰

西瓜より軽い男の子が生れ
同志の勝利煙突から煙

◇ 須崎 豆秋

保険屋は保険屋同士コーヒ呑み
少佐もうつんつるてんに禿けてゐる
もうこゝで別れならんネオン燈
ジョッキが二つ鏡へ映り
軍人會會旗を巻いて呑み直し
残る話を氣笛に奪られ
うごん屋へ下駄履いてゆくモボモガ
たまさかに訪ねて見れば大掃除
一つ一つ灯がついてゐる百姓家
腹が立ち扇忘れて歸つて來
もう少し離れて歩け氣がひける

◇ 中澤 濁水

妻の臨終 (三)

お禮もう申しませぬミ手を握る

横取つて九度を昇るミ嘘を告げ

納棺の寢間に駈された紙幣の数

ハンカチの汚れ病妻廢せこいふ

妻に死なれ屋根の布團を眺めるる

ふミ覺めて妻の遺骨を見る夜半

洗濯を流す隣の餘波を受け

一時まで縫つてミ朝のアツパツバ

饅頭屋崩すに惜しい色を分け

◇ 桑原 京郎

手鍋さけてもの勇氣がありますか

共鳴をしてからずつミ玄關子

◇ 櫻井 圓角

寺高々ミ宗教心を地に委かせ

ひこりでに家並のそろふ本通り

◇ 生田 翠夢

大屋根の春の蒲團へ寝ても見る

君ミ寝る蒲團の色も艶めいて

笑ふ事さへ今は忘れて金に生き



月評 卓を圍んで

路郎 紋太 ひろし
山雨樓 琴人 町二

近作柳樽 琴人提出

減収を氣味よく思ひ待つ電車

豆佛

琴人——緊縮、不景氣、失業と云ふ御難時代圓タクは半タクに百貨店は、週間奉仕の間へ特價デーをはさんで、最後の五分間といふ勉強ぶりも手痛い減収にあつてゐる。サラリーの懐ぐわいはタクシーが見せる片手を、尻目にかげバットの煙を廣告燈へ吹つかけて、俺には縁がなくなつたよと、幅三尺の安全地帯をステッキでこついて、むしろその減俸に痛快味をそゝられてゐるといふ、多少ルーズにして、深刻なアイロニツクを遺憾なく表現してゐると思ふ。難を言へば、下五に多少議論が出るかと思ふ。

ひろし——その減収といふのは、電車の減収か、自分の給料が減つたといふ減収かはつき

りしない。

路郎——勿論この句は電車の減収を言つてゐるのである。

ひろし——さうすると、琴人氏の解釋が當らなくなるらしいしね。

路郎——（此時紋太氏出席）さうです。自分の減俸を氣味よく思ふさいふこそが、不自然ですかられ。この句は電車の横暴即ち獨占事業の横暴に對する反感が、近來の不景氣になつて減収をしたといふことに痛快さを感じて詠んだ句である。

ひろし——それなれば、減収を氣味よく思つて電車を待たずに歩き出したといつたやうな氣持を詠ひそうに思ふ。しかるに、その電車に却つて親しみを持つてゐるやうな表現振りには感心出來ない。

路郎——反感を持てば、乗らないのが普通で

あるが、電車の如きものに對してはこの原則は破られ勝である。たとへば、世人は電車の従業員が待遇改善を叫んで、ストライキを起した時に、彼等の生活には同情してもそのストライキが長きに亘つた時には自分達が不便を感じる爲めに従業員に對する同情は反對に怨嗟又は嘲罵の聲さなつてしまふ。市電の横暴に對しては反感は持つても、自分達の便利のためにはそれを利用するのが人間の弱點だとも云へる。この句の場合やつぱり市電を待つてゐるけれども、決して親しみを待つて待つてゐるのではない。

琴人——この句が電車の減収をいふてゐるものだといふお説が出たが、成程その方が本當であるやうに思はれると同時に、この句が私の思つたより大變に、價值が減殺されたやうに思ふ。結局私の思ひ過ぎであつた爲だらう

ひろし——單に減收を氣味よく思ひながら電車を待つてゐるといふのにすぎないと思ふ。

琴人——全くそれだけだ。

山雨樓——その仲々來ない電車に面白味を感じたのだらうと思ふ。餘談だが今晚のやうな會がはて、田舎に歸る者にとつては終列車の關係があるので、電車が容易に來ないといふことは仲々至大なショックを覺えるものである。大阪市民の一人として市電に恩恵を蒙らない者は殆んどないであらうし、川柳家としてもこの愛する市電に對して、殺風景な頭から解放された詩的對象としての眺みを利かして欲しいものだと思ふ。

町二——何と言つても、市電は一番安い。乗務員のサービスや對度に不満を持つてゐて減收は當然だと思ひながらも、尙電車を待たねばならぬ氣持には同感出來る。先日大阪市電の従業員が自分達の立場を述べた聲明書を出してゐたが、なほ東京などのそれよりも大阪の乗務員は、必要以上に無愛想だです。しかし私などは毎日市電に非常な恩恵を受けてゐるので減收を氣味よくなどは思はないが、と角乗務員の立場に同情はしても、尙改善の餘地があるやうに思ふ。句としての價值はあまり論ずるには足らないやうに思ふ。

紋太——この句は機械の魔力といつたものの獨占業の横暴といつたものを、呪ひながらその便利にも従がはなければならぬと諦らめてゐる所に落ちついた氣持を持つてゐる

と思ふ。不人情さも一時の反感であることが私には察せられる。

ひろし——この句は失業者か或ひは市電から解雇された元車掌さてもいふ者の句であれば面白いかも知れない。

紋太——失業者でなくとも、普通我々にもこゝうした感じがちりちりさすことはよくあることだと思ふ。

路郎——新聞に悪しざまに書かれるとか、電車の乗務員とのいきさつから起つた不満さか、いふ様なものは個人として、どうすることも出来ないからでござらんと言へば、多くは反感の體積となつてゐる場合が多い。偶々市電の減收などを知つた時にこゝうした感じを抱くのは敢へて失業者や解雇された従業員に限つたことではない。この句の場合には前述のやうな反感を持つてゐた人がその懷裡に閉めいたものを捉へたにすぎないだらう。琴人——あまりに自分の錯覺が大きかつたために深刻味の淺いこと淋しい感じをさせられてゐる。

山雨樓 提出

お母さんもつと丸味がほしい
です

裸 人

山雨樓——此頃の母親は生活やその他の環境から尖つた顔をしてゐるのが多いやうだ。純真な子供からこゝういつた感じを投げ出されて見るこそ後に引つ込んでゐる父親も考へざるには居られない。

紋太——僕はれえ、この句を或る娘さんを主

人公として紛糾した事件が起つたやうに思ひます。其事件の解決に當つて娘の心持さ違つた冷たい方法で解決されたわけですよ。その時にその娘が思はすこの句をつぶやいたのだと取つて非常に面白く思つてゐます。

路郎——僕もそう思つて採つてゐる。娘から母親に人間味を求めてゐる叫び聲だ。もつさもその娘に取つてゐる親の慈悲心はあつたのかも知れないが、娘には或る尖つた冷たい感情しか興へられなかつたのである。かなり複雑した感情を捕捉したとこにこの句の妙味を感じたい。

ひろし——この句は前述の通り二様に解釋される所にまだ燃焼されてゐない嫌ひがある。僕は山雨樓君のお説のやうにこの生活難の時代にいらした生活を以てゐる一家を思ひたい。その場合だと「もつと丸味が欲しいです」でなく「お母さんもつと丸味を持つて欲しい」といふやうに表現すればそうした氣持がよりよく出ると思ふ。

琴人——この句が今ひろし君の言はれたやうに「持つて欲しい」といふ言葉であるさ。女の子のやうに聞える。原句下五の様なさうなほひが足りない。不足らしさを仄めかしたやうにすればこの下五はひろし氏のやうに直した方がいゝと思ふ、しかしこれが男の子だとすれば「お母さん」と呼びかけてそして山雨樓君の意味あひで打ちつけた心持から「欲しいです」として完全に意味はとれると思ふ。この際僕としたら、女の子の方でありたいと

思ふそして下五「持つて欲し」と直して貰ひたいと思ふ。

町二——僕はこの句を一讀した時男の子で母の子でもよいがもつと自分自身なり自分の周圍なりに丸味が欲しいと思ふ氣持に母に訴へたのかと思ひましたがやはり母に對する丸味の要求の句でしよう。

紋太——意味が二様にされる場合にその欠陥を句に振向けて燃焼不足だとして了ふ場合がよくあるが、この句の場合は少し氣の毒ではあるまいか、もつと取り方によつてはこの句が母親と買物に行つて品物を品評してある場合と取る人もあるかも知れないけれどもこの句の全体に持つてビシ／＼と張りきつた力を感じるものには僕の云つた風に取れさうなものだと信じます。

ひろし——まさか買物の好惡ゝる人もあるまい。

路郎——何分短詩型のことであるから時に二様に解釋される折があることはまねがれない。しがしその場合その罪が作者にのみあるとは云へない。批評家も誤評をしないとも限らないのであるから、その時の批評は第三者の或ひは後世の批判を待つより仕方があるまい。とは云ふもの評者は多年句に精進しつゝある人々であるから、それらの批評は作者にとつて相當參考になるであらうと思ふ。句が持つ味は非常にデリケートなものであるから前述のやうな二様の或ひは三様の解釋が出た所でやむを得ないが、そこに又それらの二様三様の解釋をお互に批評しあ

つてゐるうちには、正確であり動かすことの出来ないその句の持ち味を發見し得られると思ふ。

山雨樓——まきはごひろし君はこの句の下五を「持つて欲し」とする方が受けとりよいといふお説がありました。自分は原句の言葉に強く言ひきつた所に（たとへそれが男の子であらうと女の子であらうと）句の迫力を感じたものであります。往々にして句の理解を易からしむるために言葉を撰ぶ場合があるが、一休詩といふものは理解に訴へるものではなくて人間それ自身に迫り或ひは訴へるものでありたいと思ひます。その意味から言つてこの句は原句のまゝではつきりさ肯づけるやうに思ふ。

ひろし——僕は亦「持つて欲し」の方がより切實だと思つたのである。

町二——現代の所謂尖端娘が男女同權の地位を確實に獲得して母となつた際よき意味での女らしさを失つて人生の欢笑、涙、感傷を忘れた母親に對して子の切實の叫びである事も思はれて母への要求の句として戴けます。

琴人——すると子が母親をたしなめてゐるといふやうな句ひがして來て僕のあまり好まぬものとなる。本來この句は丸味を欲してゐるので強い意志の表示でないと思ひます無理のない圓滿さを望んだ句であるからやっぱり僕としては路郎先生、紋太氏、ひろし氏の解釋の方へ賛意を表したい。

紋太 提出

氣まぐれな燕病室通り抜け

星 花

紋太——病人がぼんやりと眼を開いてゐる部屋の中を燕が通り抜けた。ただそれだけだがその中に悠長な時の移り行く姿がうかゞはれのんびりとした氣持の中に、ある淋しさを持つてゐる。

山雨樓——この句は病人から見た句ではなくで第三者が詠つた句だらうと思ふ。成程紋太氏の言はれるやうな自然と人生を考へさす或る物が感じられるが上五の表現があまりに淺い見方に禍されてゐるやうに思ふ。むしろこの程度の主観はなくてもかゝると云つたやうな感じがする。

琴人——僕は病氣も快方期に向つた或る日のことで明るい氣持がこの句から受け入れられる。

紋太——僕は病人が詠んだ句だと受け取れます。燕が通り抜けたことは病者として非常に好奇に發した眼を瞠はつたことでせう。それがやゝあつて自分に歸つた時に「氣まぐれな燕」といふ批判的な言葉に表はれたのだと思ひます。

山雨樓——病人の句としてはあまりに暢氣すぎでは居ないだらうか。

紋太——それは琴人氏の言はれる快方期か或ひは小康の時か、大體明るい性質の人であらう。

山雨樓——快方期の氣分は私の場合決して

呑氣なものではなかつた。病苦が身にしみてある時以上に憔悴を感じさすものがあつたやうに思ふ。氣分が弱つてゐるので反抗的な突進的な感じは尠なかつたが、何となくいだたしい憂鬱さいつたやうなものに追はれてゐた。勿論色々な病氣の場合もあるし、氣分も百人百様であらうとは思ふが、病人の句としては少し受け取り難いやうに思ふ。琴人——それはその人の環境なり体質にもよるので今おしやつたやうに十人十色であつてみればこの病人が或ひは快復期であつてそうした明るい氣持が起きたのであるかも知れない。

紋太——僕の再会といへば、僕の場合は見聞の一つ一つが新しく感ぜられて明るいその日その日であつたやうに思ひます。

ひろし——作者が病氣で寝てゐたのか、或ひは病人の看護をしてゐたのか、或ひは通りすがりに病室を通り抜ける燕を見たのか、わからない。しかし、この句が病氣もあまり悪くなく、天氣も氣持よく晴れてゐるやうに思はれ、非常に明るい氣持を出してゐることは受け取れる。「氣まぐれな」は輕く燕を氣まぐれな奴だな」と思つたもので、この上五でその燕を生かしたと思ふ。

町二——僕はやはり、山雨樓君のお説の通り上五の小主觀が難であるやうに思ふ。病室を通り抜けるやうな燕はもとより氣まぐれだといつた常識的な説明は避けるさして、句の見付け所は二階をトンボが通り抜けるといつたやうな着想を古くから見かけてゐま

すので新らしいとは云へないが、とにかく病室の一點景は描いてはゐると思ふ。

紋太——この上五に興味を持つことは今までの川柳の特徴であつて、興味を持ちすぎることは欠點である。句を作るには「燕病室を通り抜け」だけを詠ふ心持で進んで行くべきだと思ひます。

琴人——紋太氏のお説に共鳴します。

路郎——燕が病室を通り抜けた、そしてその燕を氣まぐれな燕と觀じたといふだけでは從來の興味本位の句作から脱し切らない憾みがある。そこにトンボとか、雀とかを持つて來ても大して變らないことになる。しかし我々の句は燕でなければならぬ句、即ちトンボの時にはトンボでなければならぬ句、雀の場合には雀でなければならぬ句であることを欲する。そして作者がその燕なり、トンボなり、雀なりに呼びかけた或る特殊な感情が盛られてゐなければならぬと思ふ。

川柳塔 ひろし 提出

何をかくさん血の色は赤

雨 町

ひろし——マルキスト雨町君が血の色に託し自分の感慨を洩らしたものと思ふ。僕の「何が赤いんだ黎明の空を見よ」より餘程うまいと思ふ。

山雨樓——勿論思案系の句であるが、所謂イデオロギーが濃厚すぎはしないかと懸念する。

紋太——そう強くは出てゐないと思ふ。人の

慮を突いて意表に出たところ、面白い句として一見誰にでもよく解ると思ふ。何處かしつかりとした所はあるが言葉に飄忽な感じを出した爲めに奥深く思案をたざるといふ所までに感じられない。

山雨樓——けれども此の句を思案を辿らずして誰にでもよく解る言つたと云ふ程度の見方を取ることは平凡すぎはしないかと思ふ。

紋太——それはその表現に罪はないでしようか。マルキストでなくても作るかも知れないと思ふ。

ひろし——確かに此の句は所謂無産派川柳の如きこちなさはなくユーモア味を持つて表現してゐる。新らしい川柳の行き方として斯う云ふ方面も開拓されていゝと思ふ。

紋太——すばりとイデオロギーを出してゐるか、揶揄の味が強くないかといふ所に感ぜ方が別れると思ふ。

ひろし——揶揄的な氣持の方が多いね。

紋太——それだとアンチマルキストでも作りはしないだらうか。

ひろし——その揶揄は所謂資本家に對し、或ひは官僚に對し、無自覺な一般人に對しての揶揄であらう。

紋太——成程イデオロギーが充分に出てゐる譯ですれエ。

路郎——大いに纏んでゐるんだが、技巧の句ひが先きへ來るので一讀した時にはその巧さに魅惑されて、その後で何だか飽きが來ると云つたやうな句に出來上つてゐる。けれ

どもその核心には相當の強さがひそんでゐる。

ひろし——ひきつけられる句の方から云ふなれば同じく發表された「失職のその後も五時の笛に醒め」と云つた哀愁のあるものゝ方が讀者を牽引するであらう。とに角雨町君の作句力と云ひ、句の進展振りと云ひ驚異すべきである。

町二——「西瓜よお前の中味の赤さは知つてゐるのだ。何故かくさうとする。お前は偽善者の青い顔だ。」といふ詩を見たことがありますが、それに對する打てば響びかん眞向からの返事と此の句は思はれてひとり痛快に微笑してゐた處です。ひきつけられる句ですれエ。

路郎 提出

さみしさにボタンを一つはず

しけり

観 月

山雨樓——いゝ句ですれ。

路郎——句はこゝ來なければいけない。讀み下すと、非常に單調ではあるが、飾らず、作らず、素直に投げ出したところにこの句の言ふべからざる味はひがある。「けり」止めの句などは多くは嫌味か、蛇足かに陥り易いが、この句の場合、些かの不自然さもなく「けり止め」が生きてゐる。

山雨樓——淋しささか、嬉しさ、悲しさと言つた様な主観句語は、往々にして強いられた感じを表す場合が多いのであるが、この句は上五の措字に依つて句の全体の氣分が融融然と餘す所なく出てゐる様に思ふ。丁度繪をかく場合、白い色はさう他の色と並べても白さを失はないが、とりわけ青い色と並べる事に依つて一層その白さを増す様に表現上實に敬服した句である。

ひろし——幾分センチメンタルではあるが句がリズムカルに出来てゐるため 訴へるものが深い。

山雨樓——しかしこの句の場合、センチメンタルとみなし、リズムカルと稱へる以上に微妙なる波動を傳へるものがあるを見逃したくない。

琴人——劈頭に山雨樓氏が「いゝ句ですれ」と思はず呼ばれた儘の感じ、氣分、そしてこの句のさみしさにボタンをはずしたと云ふことが、自然にすら「さみし」ひ得て何とも云へぬ美しさがこの句の生命であると思ふ。

町二——理窟を云へば、この句の下へ七・七の十四音字を適當につけるとそのまゝ、短歌にもなりそうですが、しかしこれで好い句であるには異存はない。そして上五の「さみしさに」が説明になつてゐない點も好い。

山雨樓——僕は、この句を短歌の様だと云ふ

風にさり度くない、その様に詠歌そのものを狙つてゐるのではないと思ふ。

町二——この句が短歌の様だと云つてゐるのではなくて、下へ、場所なり、環境さ云つたものを附加へて行けば、短歌になりそうな句であると思つたのです。

路郎——これは明治時代の話ですが、若山牧水が讀賣新聞に、土岐哀果君のあゝしただら／＼した三十一文字の短歌よりも 近頃の新傾向の川柳には哀果君の 歌の内容を僅に十七字で詠んでゐる。その方が寧ろ字數が少くないだけに引き緊つてゐて 面白いではないか云ふ様な事を書いて、暫く論議を續けてゐた事があるが、先程町二君の云はれたこの句の後へ七・七をつければ、所謂三十一文字の歌の形式になるが、この後へ七・七をつけて同じ内容を詠むとすれば、それは確かに冗漫であるが、又七・七をつけて優れた内容を果してなれ得るか、どうかは疑問である。寧ろこれだけのものでそれ以上の文字を使はずに多くの餘韻を第三者に 感じせしめる所に十七音字の妙味がありはしないか。さ云つた所でこの句の内容が短歌の内容と同じものであると云つてゐるのではない事をこゝはつて置きたい。(鳥陰筆記)

増して勞苦の老がきはだつて來た。

その内につばきの花も開くだろ

大阪 三九

御寺の眞夏和尚の白衣

播摩 白水

落莫の心の隅の薄日かな

東京 春夫

(評) どうにかしてゝと思ひながらもどうする力もなく失業のドン

底に落ちて、やうやくあきらめからの心安きに住むものゝ、僅かに感ずる薄日の光り、それになほ哀れな希望をもつ心理を出して居る。

帯解いてやれば布圍へ砂が降り

神戸 桃水

耳掃除子のない夫婦靜かなり

大阪 紅旭

出産の中へ解雇の通知が來

金澤 旭花

値切られる茶碗素的な音々させ

函館 青柳

やき肉の香ひ長屋を横に這ひ

大阪 吐句坊

字の角がこれて世間へ少し慣れ

吳 落葉

モーニング妻の家計を切り縮め

大阪 鯉友

反抗心なきが模範工となり

豊橋 浮葉

夏瘦が大分肥えて鹹になり

大阪 山月

二人に波の音さへ心地よし

島根 善一

反省を促す様に降り續き

大阪 規堂

泳けよ泳けあの娘が笑ふぞ

加古川 美也光

俄雨すつかりぬれて父歸り

大阪 憲坊

導火線は氣が附かず鹹にする

同 鼈生

妹の方が太つた夏休み

加古川 篤男

たんすにも秋着る着物ないのなり

伊丹 利春

赤くなりきれぬ吾なり錦魚浮く

釜ヶ池 愚寵

(評) 青春の血は躍る。マルクスの理論には心をひかれ、眞理だと思ひつゝも、あいつは赤いさ云はれる事を恐れる卑怯さを思ふさき、錦魚は無心に生活を喜ぶ如く水玉を吐いて居る。

鏡臺に母の寫眞を見比べる

長野 蛙鼓

やがて着く港へ揚荷をまごめ

伊丹 翠山

若き方よりタイピスト退職し

大阪 浩村

うつかり色街の灯にもまれてた

郡山 右月

慰安會諸國の唄が酔ふて出る

大阪 北人

黙々歸る夫婦へ星が落ち

島根 利春

不景氣だ三軒並んだひやし飴

大阪 素心

頼りなくバリカンが行くはけ頭

犬山 練屋丁

海水着きるさ女の大膽な

加古川 泰山

(評) ふだんは肌をみせない女も一度海水着をつけると勇敢である。

海國女子の横行で海岸はエロの満喫。

信仰の心も起きず平和に居

大阪 野人

交番所禿けた巡查の笑ひ聲

京都 司郎

斷食療養

味噌汁の香が無想から引戻し

大阪 一騎

ネクタイを取りつゝ覗く枕蚊帳

京都 丁の字

乳の香に捨兒のそばへ犬が來る

大阪 樂鳥

女房さ喧嘩しいくほろを賣り

大分 蚊郎



旅のこゝろ

(III)

大沼より白河まで

麻生路郎

大會のあつた翌日——。函館から八里離れた水郷大沼に遊んだ。一行は花童子桂花(函館)不浪人(青森)三休(渡島)夜半杖(札幌)錦浪、三太郎(東京)路郎(大阪)の八人、それに校書幾名かゝ加はつた。

◇

百二十有六の島嶼を基布した詩の大沼の春は静であつた。湖畔の紅葉館からは渡島富士の稱ある駒ヶ岳の雄姿が眞止面にあはがれた。山頂からは、悠々せまら

ぬ態度で白煙を吐いてゐる。

案内記に據れば駒ヶ岳は「龜田郡茅部郡の二郡の境界に蟠居し、北緯四十二度四分、東經百四十度四十一分の地點に屹立する海拔三千六百二十六尺の活火山にして北は直ちに噴火灣に面し南は所謂渡島山脈に接すれども豊かなる裾野により孤立の狀をなす。寛永七年六月及び安政三年八月大爆破あり、溶岩飛散し死傷者少からざりしと云ふ。其後明治二十一年及び同三十八年八月小爆發あり、黒煙

噴騰直上三千三百尺に及び其の狀凄壯を極む。爾來活動力を減じ以て今に及ぶ。さあるが昨年は又大爆發があつて、世の終りかと思はれたさうである。が今日、私たちの前には再び雄麗な山容が、美しい裾野が手をひろけて私たちを迎えてゐる。

一行のために紅葉館の庭先から遊覧船を出した。酒杯に親しみながら湖中の島から島を経過つた。興到つて紅葉館に戻り、短冊を汚した。

私は

君とあれば眼に島を見ず山を見ず
百二十有六島に春の顔

なごの句を得た。

◇

大沼から函館に
引返した一行は、
前方の見えないや
うなきつい風の中
を、根崎温泉に向
つて自動車を飛ば
した。その夜常盤
木で、ひぐま川柳
社の歓迎宴があつ
たからである。

少し時間があつ
たので私たちは、
海に面した一室で
寝轉んで、大沼か
ら持越した酔をさ
ましてゐた。すぐ耳の傍で潮が高鳴りし
た。

寝て聞けば浪の音から浪の音

さいふ句が私の脳頭のなかに浮んだ。拙
い句だとは思つたが、浪の音から浪の音
をさうするこゝも出来ない。これ以外に



(昭和五年五月廿四日
花五村邸)

春の河白

前向列右よ五花村君令息昂君三君謹也君中列ニタ子夫人
喜四雄君本誌路郎主幹・木族君・友列花村君・汀舟君

三四

命場の準備が出来ましたから云つて呼
びに來た。

それで階上で、ひぐま川柳社の諸君に
あらためて親しみをかさねるこゝになつ

た。いろいろ欸待
の限りをつくされた
私たちは再び陶酔境
裡の人さなつた。
雨がしきりに硝子
戸をうつた。

◇

花童子君二人で
今年も立待岬の共同
墓地にある啄木の墓
へ詣つた。墓碑の上
部には啄木一族墓の
五文字が横書に彫ま
れ、その下部には
啄木

東海の
小島の磯の
白砂に
われ泣きぬれて

蟹ごたはむる

「一握の砂」の最初の歌が数行に彫ま
れてある。墓碑の裏面には

啄木書簡之一節

これは嘘いふはりもなく正直に言ふの
だ「大丈夫だよ」、おれは死ぬ時は
函館へ行つて死ぬ」その時斯う思つた
よ、何處で死ぬかは元より解つた事では
ないが、僕は矢張り死ぬ時は函館で死
にたいやうに思ふ、君、僕はさうして
も僕の思想が時より一步進んでゐるこ
いふ自惚を此頃捨てゐる事が出来ない

明治四十三年二月二十一日

東京市本郷弓町二の十八

石川 啄木

郁雨兄

ミ、彫まれてゐる。歌集「一握の砂」は
明治四十三年の出版で、藪野椋十氏の序文
があり、デヂケーションとして「函館な
る郁雨宮崎大四郎君、同國の友文學士花
明金田一京助君に捧ぐ」云々記されて
ゐる。そして啄木が永眠したのは明治四
十五年の春であつた。

嘗て啄木の歌を愛誦し「一握の砂」な
きは、すっかりそらんじてゐた私は函館

へ来るに妙に墓の前に立ちたくなるのだ
「僕の思想が時より一步進んでゐるこ
いふ自惚を此頃捨てゐる事が出来ない」云
つてゐた啄木も近ごろではもう啄木でも
ないぢやないか云はれてゐる。時の力
はそんなに強いものだらうか。

それから「一寸待て死スル程ノ事情ア
ル者ハ」の木標の立つてゐる立待岬の尖
端へも行つた。太平洋の浪が直接に打ち
かへしてゐるだけに、特に人のこゝろを
うつものがある。夏になるこゝろから飛
び込む者が多いので、日本メソヂスト教
會であんなものをたてたんだそうだが、
こんな文字が眼に這入るやうだつたら屹
度死なずに引返して来るに違ひない。ミ
思ひながら私たちも引返した。

このころへはまだ「函館のこゝこ、

湯の川のこゝこ、その奥のトリスチヌの
生活のこゝこ、鈴蘭のこゝこ、函館の人々へ
の別れの言葉、青森のこゝこ、夜行列車中
のこゝこ、なごをこまぐさ書きたいと思
ふが、そんなこゝこをしてゐては本年中に
片附きそうにもないので思ひ切つてカッ
とするこゝこにした。

こゝは岩手縣の西端である。曉の車
窓から微風が面をうつのも快よい。仔馬
が野路を散歩してゐるのが見えるが誰も
それを見張つてはゐない。大阪あたりで
犬が街路に喜戯してゐるのにも等しい自
由さである。奥羽山脈は緑の濃淡二色こ
なつて車窓に迫つてゐる。時は五月の下
旬だといふのに、そこには晩春のあはた
しさもなければ初夏の匂ひすらもない
やうやくにして冬の眠りからさめた蕭條
たるありさまである。

宮城縣に這入つてからも景色には大し

て變化がない。線路に沿ふた小徑を二三人づゝ連れ立つた小學生の朝の姿が見える。一里も先の學舎へ通ふのであらう。私は昔の自分の姿を見せられたやうな氣がしてならなかつた。



泉崎（福島縣）の附近に来て、はじめ春の訪れを見た。けんけ畑やなたね畑が車窓の眼をよるこぼせる。

十一時十七分（二十四日）白河に著いた一寸、五花村君を訪ね、次ぎの汽車で引きあける積りで、赤帽に荷物を預けた。赤帽が頼んで呉れた俵が、ゆた／＼揺れながら、約十分ばかりで番士小路の五花村君の別邸へ私を運んだ。

來意を告げるゝ早速奥に招じられた。夫人の電話で五花村君が銀行から歸宅された。五花村君は一別以來の挨拶も簡單にして『東北川柳』の同人達へ電話された。總て葉吉、喜四雄、汀月の諸君が見

えた酒杯を手にして柳談に花が咲いた。記念撮影をしてから、白河の關趾へ自動車を驅つた。一行は五花村、葉吉、喜四雄の諸君と五花村夫人と二人の令息と私の七人連れだつた。關趾へは三里の行程。

ここは能因法師が

都をば霞と共に立ちしかぎ

秋風ぞ吹く白川の關

と詠んだ古歌で有名なところである。

『こゝに關所があつたんだそうです』と葉吉君や喜四雄君が雜草や老松老杉で覆はれた或る地域に對して説明の勞をせられる。なるほゞさう聞けば四方は山で圍まれてゐる。迂散な手合を捕えるのに、こゝで頑張れば袋の中の鼠だ、講談を讀んでるやうな空想を晩春の雜草へ投つけた。

小さな社前にある樟の巨木に藤の蔓がからみついて、淡い華やかさを見せてゐる。春の柔かい午後の日射しが、私たち

の肩をすべつて、私たちのこゝろを詩の世界へ運んで呉れる。

千年餘をすぎた樅の木理についてもいろ／＼談を聞かされた。この外に、今から約八百年の昔、藤原家隆郷が明神に奉納した云ひ傳へられる二位杉や、

十月例会

日時 十月六日午後六時半

會場 大阪市南区清水町市電停留場西入北側

端の坊

兼題「垢」三句 路郎選

會費 金參拾錢

源義經が奥州の藤原秀衡のもゝから關東へ上る時、旗を立てゝ兵を整へられた云ひ傳へられてゐる旗立櫻や、治承年間に源義經朝臣が兄賴朝公の舉兵を聞いて、平家を征討せうとして發向に際して小松（平家の別稱）を射る矢である



ヨロズ セツク ヲ
ムネ ト シテ

コノ マーク ノ
メイヨ ニ カケテ

フコマチ モ

セキニン ヲ モチ

フコマチ モ

シラセウ ヲ ヱクシ

フコマチ モ

ヨイシナ ヲ アツカイ

オキヤク・シマ ノ

ゴヨウ ヲ ツトメマス。

オウチカシタイ ニ オイテ
ツキニ シイタイ ネグン
ヲ シモチ オキヤク・シマ
ノゴベリヲ ハカル エセ
カ ヒトリ マツカテ アル
ノミ チ アリマス。

マツカテ チ オカイモノ
ヲ ネカウ コト カ シイチ
ニ ヨロズ ノ セツク ト
ナリ。 シラセウ セイカツ
ノ アラテイヲ ハカル コト
ニ ナリマス。

オウチカ ニツギルハ

松 坂 屋



一路集

(募集句)

秋

蛭子省二選

軍隊の兄へみのりの便りくる 影人
流行に又悩みある 秋になり 志洋
秋の陽をあびてダニる 夫婦 千春
朝の縁番茶に秋の色を知り 柳次
ひまり旅秋の夜汽車に眠られず 市公
一坪に足らぬ庭へも秋がくる 憲坊
はれた秋男ひまりが馬鹿くし 麓生
栗飯へ故郷をしのぶ年がたち あきば
出戻りも髪を結つて 秋祭 スエノ
縫針が指にささつた 秋の宵 雨町
秋晴の野に出て母の慈見なり ちらつば
病院の屋根 秋晴のプロペラ 奈緒美
満員車秋の日ざしに埃する 素峰
獨身に振毛が目立つ秋になり 没食子
後添の色の白さへ秋がくる 新水
朝顔が小さく咲いて 秋の雨 櫻果
二十五年やつぱり夫婦きりの秋 不然

秋がくるこは悲し嫁き遅れ 圓角
刈入れがすめばきうにかき氣を 青水
ボケツトの扇が破れ秋に成り 吐句坊
懐ろ手秋さいふのに金がなし 芦穂
氷の店替へ秋の花を置き 銀花
秋を待つてたのか隣の娘は死に 白雨
減給に帽子かぶらず月はすみ 普天
妾宅の柿が熟して客があり 桂枝
寝轉べば秋の疊が肌にしみ 枝
藤椅子が尻に冷たく秋がくる さだを
秋のひざしを掌にうけてみる 吉絃堂
遠足の唱歌へ秋は晴れてゐる 笑因
秋になればお寺参をしてくらし 青柳
寝轉べば秋の逝く日の老を知り 海洋人
しみじみ知る貧乏に秋が澄み 佐得菓
秋の陽へ張板向をかえてゐる 菊路
柳兒

續川柳家の戸籍調

係 山雨樓

(一)姓名(二)雅號及別號(三)出生地(四)現住所(五)生年月日(六)職業又は勤務先(七)好きな句(八)自信の句(九)川柳以外の趣味(一〇)配偶者及子供の有無(一一)嫌ひなもの(一二)川柳に手を染めた年月

(230)

海野夢一佛

(一)海野信正(二)夢一佛前號夢之介、唄之介夢廻家、紫縣其他(三)東京市(四)東京市外日暮里町冠町二丁目七〇三(五)明治二十六年六月六日(六)新聞記者(七)澤山(四百字以上に付省略)(八)自然に出来た時は皆自信あるも時たつと物足らなくなら癖あり(九)劇(十)有、子供は死別(十一)おつちよこちよい、雑音、水つ氣のない食ひ物(十二)手を染めたのだからうだか判りませんが十二歳の時窪田而笑子さんに川柳曾に連れて行かれた事があります、十六七歳からニキビ文學俳句、川柳、冠句、情歌、狂句、へなぶり手當次第、川柳の活字になつたのは十七歳の二月頃の讀賣新聞の紙上

(231)

佃 嶺 月

(一)佃峰雄(二)嶺月外に森田美禰男、朝海如鏡等(三)神戸市(四)神戸市中山手通一丁目二四〇二〇六五、明治卅八

關西線の秋が楽しい二人なり 三洞十
失業の中折帽へ秋ぐもり 北人
張替し障子へ秋の肌さわり 兎卓

◇

建替へた障子で秋の虫をきき 耕民

みごに菊を咲かせて心臓癲癇 丁の字

無期徒刑もよく知つてゐる秋だ 樂之雨

蟬一つフエルトの先へ死む 勝二

朝顔の種ばかり犬の喧嘩 英賀夫

(選後小記) 八月十四日書留で句稿が着き、

家族がお盆の法會に出掛つた留守を幸ひ、

探選を了した。作句者諸兄が眞夏の酷暑に

倦まず、精進された事に表敬し、いたく親

愛を覺ゆる。が私としては今迄になく、全

没者を出したのは、心苦しい反省を繰返す

のである。新しく斯の道に入られた士もか

なり見出しはした。これに失望されず、一

層の御勇奮を祈つて止まぬ。

子の趣味に個性がみえる秋の夜

此句に行當つた時、「個性」が出てきそナ、

と思つた。前年の流行語で、炭俵の個性、

トマトウの個性、WCの個性、女湯の個性、

浅草の個性等々、凡そ個性と言つてしまへ

ば始末がつくかの如く亂用する。今札上の

運 命

運命のそれからさく儲け出し 青柿
運命に任せて裏に住んで居る 吉祥
運命を促がす様に手を握り 樹光

二三詩を一寸開く、

物置の中に個性を見失ひ

數石の個性のつきるばかりなり

指々の個性で練めてゐるこぶし

蔵書票はつきり個性を見せてゐる

など、どれもツマラない。見て「個性」なる

文字の活用の困難であるのがわかる。處が

幾分「個性」が下水になりにかけたなら、「意識」

が擡頭してきた。「秋」のうちに。

秋さいふ意識はつきり虫の聲

夏夜の食慾秋へ意識する

などがあり、随分生硬な理窟ばさである、

テ某誌には

微菌は百度の直射意識する

飛行機が吾が存在を意識して

曉の空へ暑さを意識する

があつて、悉く可なりといふわけにいかぬ

「意識」を哲學的に云々するのはないが、

さりさて俗語でもない。へまだ通俗語となり

きつてない。してみれば意識本末の意味も

一應は研究して置くべきで、そうなると

やたらに「意識する」なんて簡易には形づけ

得なくなる。表現とは決して御便利主義の

ものではない。流行にも善し惡しあり、眞

摯な態度で進まねばならぬ。

高 橋 か ほ る 選

社を退いて運命觀が又變はり 麓生
運命の荷車ばかり引いてすぎ 伊三郎
運命が馬さ一諸に暮らさせて 戸良藏

四〇

年三月二日生(六)青物商(七)二三先輩の

句に好きなのがあります「晝の風呂氷ぐ

氣にさへなる父よ路郎、」殊更に雪は女

の髪へ来る「永府、」長命の相ある男門を

掃き「紋太等、他は思ひ出せず。(八)「男

には惜しい眉毛も何時も母」舊作ですが

お許し下さい。他に「東京はさのへんこ

聞くなつかしさ」(九)別 ままこつたも

のはありません。趣味で無いかも知れま

せんが西洋映畫を見にゆくくらひが病

春になり」の自句に慰められてゐます。

したがつて子供は……(一)「食ふものに

なら多く有りすぎて枚舉にいさまなしで

す(一二)川柳を知つたのは大正十年頃

一時中絶して句會に出席したのは大正十

二年九月夢路氏等の「はこやなぎ」句會で

す。

(202) 伊 藤 愚 陀

(一)伊藤傳次(二)愚陀(三)大阪市瓦二

丁目(四)大阪市東區仁右衛門町五〇八

(五)明治四十二年十一月二十四日〇〇教

室で居眠ること、しかし時折勉強さかほ

します(七)「秋さらり銀の襖のもののおも

ひ路郎春の灯に好色鼻のつやうけき」

亂耽、亂耽兄の句に心引かるゝ事多し

(八)誌上に出たときは大いに自信あるが

少時するま自信の薄らぐ事妙なり(九)映

畫演劇麻糸水泳煙草(十)何處かにゐるか

運命を考へ癖に添ふてゆく
運命の手に取る筆に先きが無し
運命のこは今宮酒が入り
運命の又正月がやつて来る
運命が明治の頃を懐しみ
電柱の影運命を知らず様
運命が落ちてくねた頼の肉
運命のまだやめられぬ勝負事
薄命であらふが美人に生れたり
運命をはつきり線の上に見る
運命を五十錢で見えて貰ひ
運命をかたづけける氣の肩の息
運命が彼奴を偉くしてしまひ
運命の末路唇かむんでゐる
三年を無事に過した妾なり
運命がだんく恐はくなつても
さだを

地 圖

亂 耽 選

探勝會地圖にない道知つてゐる
書いて來た地圖でたづね郊外地
宿題の地圖根氣よく塗つてゐる
威張つて顔がおかしく地圖の上
坪敷を聞き會社の青島眞
本部では地圖を擴げて弱つてゐる
そんな國もな地圖出して來る
日本の惱み日本の地圖の色
荒浪に流されさうな日本地圖
雨柳町

運が無くあせつて金をへらす
運命にしてあきらめる母と居る
クラシック靜に運を抱いて生き
運命は二人を海へ誘ひゆく
運命をさうしてやらう原稿紙
運命を悟つて見れば欠伸が出
鮮人の歩み運命靜かなり
南洋へ運命乗せて行つたさ
運命さあきらめダイヤははずす
運命を笑ひ踊り子辻へ立ち
運命が教へてくれた唄と三味
運命が賣らす鏡にふたがあり
運命が賣らす鏡にふたがあり
かほる

友 淵 貴 山 共 選

二 秀

小屋の焚火へ明日の地圖を出し
策戰の地圖參謀の指が匍ひ
世界地圖俺の住居は何處にある
全町の地圖へトランク立止り
今降りた行商で占める案内地圖
先生よ、高い生徒が地圖を掛け
長旅を如實に語る地圖となり
頂上をきわめて地圖を擴げられ
碧水

もしれません、ゐないかもしれません
(十一)氣分によつて變化多し(十二)昭和
三年一月號の川柳雜誌より
(230)
中 島 鐵 洲
(一)中島(二)通稱義明(三)鐵洲(三)及
(四)鳥取市川端一丁目三十四(五)明治二
十三年十二月廿日生六鐵工請負(鳥取
で一番小さい工場です)(七)お互の世に
しやうとして角がたち路郎、常にほしき
幕開き時の心もち荷十、とても深山あり
ます(八)ありません、残念ながら(九)郷
土玩具創作(一〇)妻あり、子供、男二人女
二人(一一)ブル奴(一二)昭和三年四月頃
より川柳雜誌 誌 大 阪、時事柳壇に投句



杭 全 町 MEMO 雨 緑

▼關本雅幽君が健康回復と共に同人に復活
され、新に鶴町支部を開設されることになり
ました。活躍を祈ります。
▼上野錦水君が今回社友として入社され「小
松支部」を再生させることになりました。活
躍を祈ります。
▼西田紳樂君、田中凡骨君が新に入社されま
した。活躍を祈ります。
▼同人福田山雨樓君は八月廿二日、紀州道成

人間のまだ、住める世界地圖
地圖を持ち磁石を持つて踏迷ひ
この地圖の大阪雨がふつてゐる
附録地圖提けて勧誘やつて来る
繁華の又地圖を出し地圖になり
湯上りへ地圖を據けて山近し
地圖を見て大阪の橋仰山な
演習の地圖戰蹟を物語り
地球はまるいんぞよ地圖を出し
天王寺地圖持つたのへ皆たかり
地圖だけで諦めてゐる長屋の子
地圖を出し此處アルプス銀座
汗の香をフイと感ぜ地圖へ寄り
荒涼のロシヤは地圖につてゐる
教室の窓をのぞけば地圖が見え
低氣壓を地圖を追ひ廻す
一人旅地圖とは別な橋へ出る
世界地圖血の色にまだ染めた
地圖を見て老眼鏡を買ふさきめ
唯そこにラウクワグに地圖と手記
板へ地圖は事務所に土方も居
改札へ一人おくれ地圖を出し
戦争がまた地圖の色一つ變え
未成線十年先も書いておき
廣告の略圖一町獨占し
土產物質ふ頃地圖はほつきかれ
山小屋の焚火へ明日の地圖を出し

千春 奈緒美 瓢山 耕民 青水 明果 蚊郎 青柿 濱郎 英賀夫 道樂 靈 柳精 素峰 五郎八 涼哉 海洋人 青柳 桃水 鯉友 みはる 裸人 あきら 吐何坊 紅 桂舟 山月 三洞子

滿洲の地圖に將軍頰の色
踏切ミ橋ミ湯屋で地圖が出来
地圖にない道を辿つて猪を討ち
何の氣か診察室の 世界地圖
管内の地圖はなりになりか
人間の慾現はなり地圖の色
名所地圖そう遠ければ止めて
旅費の外彼の女へ地圖を書き
地圖なんかいらぬ無銭旅行来る
斜交いの道が地圖にはない
地圖を手に父下宿屋へやつて
新聞に子供の地圖を出させて見
洋行の便りく地圖を見る
一階がり葉書へ地圖を書て来る
航空路生々しい線地圖へ引き
この赤は日本の國と孫は 指し
地圖に名所へガイド連れ行き
一またぎ股いで見る世界地圖
夏休み地圖を書くのを氣にする
六甲へ行くにも地圖を一枚買ひ
この河に添そ我が家も地圖に
あてのない旅路に地圖をもまし
地圖へ輪をつくつて見る貸浴衣
一同の旅へしつこく地圖をくり
病床へ地圖やら土産ひろけられ
荒浪に流されさうな日本地圖
宗教の分布も地圖は色で分け
杭一つ地圖一枚で土地會社
大阪に居て大阪の廣い地圖

圓角 吉絃堂 芦穂 暢夢 櫻山人 影果 桂枝 佐保蘭 新水 スエノ きま太 普天 柳次 湖山 貞次 笑四 芳秋 樹光 麓生 白雨 らつば 没食子 市公 同 雨町 同 然

寺から傾りを寄せられました。
▼徳田大閣君は朝鮮の金剛電鐵へ就職され
ました。
▼河野双車君は九月九日雨蛙川柳會の人々
と徒歩で生駒へ吟行されました。
▼川合舟々君丹後の宮津へ行かれ、西島トシ
ナ君に會はれたそうです。
▼番金川柳社では、國勢川柳大會を九月九日
に中央公會堂で開催されました。
▼高峰柳兒君は長野須坂町臥龍公園で納
涼川柳會を催されました。
▼高山茶撫郎君の嚴父が、八月十六日八十六
歳で長逝されました。哀悼の意を表します。
▼田邊若香龍君は、母堂が八月十五日長逝さ
れたので郷里で住居されることになりました。
た。哀悼の意を表します。
▼福田鶴峯君の令息肇(二歳)が八月廿九日
長逝されました。卅日葬儀には豆萩芋穂泊水
君と私が列席致しました。
▼本號の編輯は路郎先生、ひろし、夢人、町二
愚陀、雨町、山雨樓、公二諸氏と私とで致しま
した。

轉 居

佃嶺月君は、神戸市中山手通一丁目二四〇ノ
二〇六山本草石君は名古屋市中區車道町七
丁目五溝口方へ夫々轉居

正 誤

前號四六頁下段九行目、丹生三霞氏の「或る
夜」更の「漂然」とあるは「惘然」の誤
前號三三頁下段十行目の「水原」とあるは「水
原」の誤

地圖で見る日本の存在よ 今雨
三等車明日着く街の地圖を見る 同

(佳)

富山から樂何なふて地圖になれ 四五磨
地圖を見て燈臺守をあきらめる 立身
案外な旅行へ地圖を借り歩き 落葉
果しなき宇宙の中の世界地圖 影人
地圖で見るこれつばか。世界。志洋

句會の横顔 (三)

大正十三年一月十九日南堀江書林俱樂部
に於て川柳雜誌社創立句會を開催してか
ら昭和五年七月六日端之坊における本社
例會は實に例會九十三回に及んで居りま
す。それ等の句會の出席數を調べてみま
した。(朝田新水調)

(出席回数一回分の續き)

宇佐見、詠逸、角内、清堂、素峯、竹本
忠八、千鳥、角門、伽藍堂、永又、柳清
遠志、杉山、竹風、大地、桐村、桃源、
蒼太、瀧甫、郎舟、香瀨、光吉、葵一、
蒼太、主税、天海、豆仙、豚舟、豚二郎
晏岐、清水、光明、郊村、強風、つぼや
柳南、浦路、遊狂、柳坊、愛知、學男、
嘉月、きくを、すみを、柳之助、延湖、
柳象、鶉亭、柳清、かず枝、銀波、靜馬
守夫、村雨、市壽、露葉、潮、秀哉、
百日紅、普天、文溪、天巴、南双、白澤
花磨、兵太、井面、蛇峯、久雄、夢草、

(人)

巡禮は地圖を持たない旅をする 芦穂
何番地かい。交番地圖を見る 菊路
日本を鞭で示せば隠れてる 吟風

(地)

地圖を覚えてお伽嚙の山も知り 樂之雨
地圖にない所へ女賣られて來 勝二
金持てば地圖の存在なき忘れ 素峰

(天)

善二、弘行、新莊、幽里、啞板、韋駄天
花城、大頭、葛葉、不盡、和兵衛、敏雄
岡田、藤堂草、クラブ、芳翠、徳生、紅
法師、實、因蝶、國次、久我鬼、謹吾蓉
蛸天、文亭、逸鬼、長門守、木念仁、甲
南、定吉、句三味、靈中、白露、廣奴、
幾之助、龍水、湖浪、幸弘、啓吉、幸緒、
吞風、孤城、柿郷、凡痴、蒼馬、文露、
富、翠仙、郡、女洋、健秋、笑人、宗石
太門、實吉、閑倉、蜀洞、俊治、紅鳥、
工藤、薰石、可兒人、秀雄、正雄、オ一
イ、天真、始彦、左馬樂、金平、右平、
草人、蝶之助、破傘、遊魚、重陽子、覺
市、勝二、一枝、吾三、清月、斗人、春
波、秋三、六郎、五月、素郎、三樂、六
角、たもつ、秀坊、一丸、契柳、笑水、
一里齋、義坊、しづか、朝雨、七美佐、
赤ン坊、一雄、雲柳、播洲、凡夫、萬古
昌雄、木魚、鬼堂、雀淚、將兵、茂幸、
義夫、小鬼、正博、北嶺、梵阿彌(以下次號)

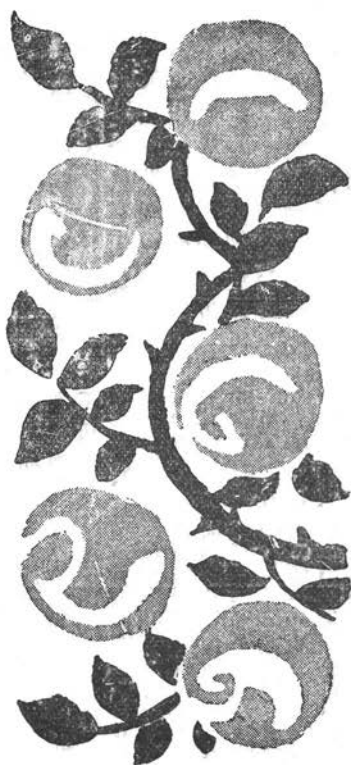
新誌友

(五年九月十四日まで)

「川柳雜誌」前半年分壹圓八十錢以上拂込
みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲
載します。何卒此際新讀者を御勧誘さ
れる様御願ひ申します。御紹介下さる
方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差
上げますからお申込み下さい(縁雨)

井上久磨緒、杉谷専路、土井かず子、兒玉
互苦路、中島巨柿、狩地茂都子、釜瀬無帆
安部紫光(伊藤緑之助)幸松田久磨、西田稔
(松盛翠人)竹原清一、長沖重治(廣瀬三郎)
岡田純一(越中今雨)濱野敏子(橋本綠雨)渡
鴻正高、梅村路島、一柳憲之助、鹽田素萌
長景雄、加藤潔、大野元、新井勇吉、作藏
涯一、久永靜太、宮入近治、稻山猪平、關
本雅雄、杉田貞之、山口鐵三、畑田炭車、
和田源坊、竹本頼光、立井美坊、線谷摩那
火、鈴木九葉、丹波太路、荒井英賀夫、山
本厚藏、金井有爲郎、太田誼子、宮城噫亭
青山孤舟、高木習々、安多政市、名越不然
古門康雄、三好計加、定廣定左衛門、橋本
源悅、上野錦水、森玄名(事務所)括弧内悉
介者

BUILDING



けはい

伊藤愚陀

夏の終りも秋の初めもつかぬさある日、彼は音もなく風こも云へぬ風がそより裸の脊を觸れて行くのを感じた。同時に今讀み終つた彼女からの手紙にもはや秋の理性が鋭く突ささゝつてゐるのを見逃さなかつた。

合つた。彼彼女の唇が、燃え上るべき唇に彼にあるにんやりとした氣を

感じてしまつた。秋の氣が唇へ上つたそして彼の頭もそんなに冷かな秋になつてゐることを肯定しはじめた。

机に凭れて落書を樂んでゐた私の心は突然三角形にゆがんだ、その頂點へちぎれた雲の様にふんわりと生殖器がさまつた。その下から私は眩しい程の星屑を眺めて居た。

言葉

出口雨町

百パーセントといふ言葉は少なくとも

それが生れた當初には新らしい言葉であつた。しかし今日ではもう何等の新鮮味も持たぬ程に老衰してゐる。そしてそれが資本主義の末期に於いて、さしく製造される言葉の運命である。

『私はあなたを愛します』といふ言葉の裏には『あなた以外の誰にも浮氣は致しません』といふ誓約が含まれてゐる。同時にその言葉は『私を愛して下さい』といふ歎願の聲でもある。

愛してくれとは過ちすぎる

雨町

名譽毀損

西田浪人街

霸氣満々たる詩人「僕の新刊の詩集に就いて評判はどんなものだ」

發行人「左様ですね、貴君も同名異人の方から、あれは決して僕のものではない云ふ事を發表して貰はぬに僕の名譽に對するに抗議を申し込んで來ました」
(外國の週刊雜誌より)

歩みつゝ（その一）

水谷 鮎美

去る日の晝すぎ阪神梅田終點で路郎先生を見つけました。見るに先生のつい眼はななごころにいちやく店が出てゐます。先生はなつかしうにそれを見てゐられました。私の頭のなかでは先生は亡くなられたロンドンさんの事を想ひ出されてゐられるらしいのです。先生の眼にはいちやくのこれもこれもがロンドンの顔や動作や聲や寢顔に見へてゐたことです。

裏へこいそらいちやくをこつてやろ
お父さんは不覺來なくも生きてゐる
こいふ先生の句を思ひ浮べました。もう
二三歩で先生に言葉をかけられるところ
まで近づくと先生はこちらをむかれてに
つこりこされました。私のこころには涙
がほたりと落ちました。

よいはしご天までさやくよいはしご

ロンドン
こいふ句が九つで亡くなつたロンちゃん
の辭世句になつてしまつたのも悲しいこ
こです。

地球の色

尾崎海洋人

川柳家が立つて居る 黄色い空氣
俳人が立つて居る 茶色の空氣
歌人が立つて居る 紫色の空氣
詩人が立つて居る 水色の淡い空氣
そして其等の丸くなつたのが地球ではな
からうか——。

男

電車の中で男の巡禮が水をほゝばつて
居ました。女の巡禮は恥しうにして居
ました。男の特權でせうか。

萬病一元

大久保大夢子

六時を打つた。家内が漆喰塲を洗つて
居るせはしい音だ。モウ起きずばなるま

いが今朝はまた左の足首が痛んで居る。
モウ四ヶ月もなるが腰から兩足が痛む。
關節でなく筋肉らしい、トーカーのやう
に——痛むことは分つて居るがさうも震

源地がハツキリしない。病院へも行つた
『心配はない薬をあげませう』別段心配
はして居ないのだが薬を呉れら以上痛み
位止めるんだらうと思つて四五日塗つて
みたが一向變りがない。按摩もよんだ。
アンマリ効がない。そこで石切さんこ來
ねはならないんだが布切れを貰いて財布
を開けたり始めたりも億劫だし、さりと
てお父らアツからう。オマケに半休も過
ぎた九月に入つてから餘計に痛む様だ。
エーマよ今日は休んでコマセこ枕許の
新聞を取上げるミバタリ顔の上へチラ
シが落ちて來た。『三度衆議院を通過し
た難病治療〇〇〇療法——指壓術に依
り病根を検出して之を除去す。例に曰
頸部筋腫七日にて全治牧野伸顯殿腦溢血
施術二回床次竹二郎殿等々……コレだコ

レある哉だ役所へ行かなかつた事を感謝しつゝ、いそいそとして道順をたよりに出かけて行つた。思つたより小さい家だなア、イヤ、偉人は大夏高樓に在まさぬものだ。案内を乞ふと、衡立の蔭からお上んなさいと来た。先生だ、五十餘りの健康をうなだ先生僕の顔をデツシ視入つて曰く「貴郎は肉食が過ぎてる、十年程以前から、しかしお母さんは菜食家だから體質はよろしいデワ診て上げませう」ハテナナル程母は菜食だ、仰向けになるミ先生爪を跳め獨特の指壓を一つ加えて「アンタは性慾が衰退して居る胃も悪い、皆肉食が過ぎたからだ、私の言ふ様にすれば足の痛みも止まるし性慾も恢復します」性慾の恢復！何ミ天來の福音ではないか「先生ッへ註此センセイは僕の肺病をついて出た敬稱であります」性慾が恢復しますかそれはさうするんです」指壓術は三十分餘も續いたが足の痛みなさいいつのまにか癒つてしまつて居た、歡

喜してお禮を申述べて電車の人となつた轍のきしる音を夢のやうに聴いてユミ上けてくる嬉しさを押へて居た僕はドヤ／＼入つて来た人達に我に返つて席を譲らうとしたら、ギクリミ左足が痛んだハテナミ足を動かそうとするミ痛い、益々痛い。家へ歸つた頃は元の痛さにかへつて居た。財布を開けてみる、幾枚かの銀貨は姿を消して居た。

夫婦喧嘩

松盛琴人

暑い峠もやつミ越したので好い氣持で夢路を辿つて居るミ、手荒く戸が開いた「誰か戻つたな」ミうつら／＼しながら聞いているミ少し酔つてゐるらしい隣の主じんだ。昔は角力取であつたさうなが、でつぷりミ肥つた體格が幻のやうに浮ぶ一何だ、エ、それがぎないしたミ云んぢやい、斷りいふたかて？……遅く戻つたかてなんぢやい」大きな聲に僕は眼を覺して了つた一デモ今日は五日……「五

日がきないしたんじやい……」何かなんだか理由は判らぬが、正に壁一重隣りは形勢不穩だ一其時ドンミ何か投げ付けたりしく合の壁が崩れ落ちるやうに震へ續いて何處かを打つ音がビシヤリ／＼と聞える。僕の妻は寢ほ助で能く眠つてゐたが其音に吃驚して布団の上に跳ね起きて地震や……ミいふ僕は周章で妻を制した朝になつて僕は昨夜の事が氣にかゝつた。彼の強力で叩かれては妻君半死半生だらふミ、朝の膳に向ひながら妻へ話しかけた。「デモお隣の旦那は女の頭へなんか手を上げませんワ」それは僕が一度撲つた事々言ふて居るらしくそれたので、聊か甲譯的に僕は撲つたつて彼那に酷く打ちはしない。併し何處をあんなに打つたんだらふ？、妻は笑ひ乍ら此の疑問に答へてくれた。一お隣の奥さんは言つてましたワ、いつもおいぎを叩かれるんですさ」僕は小山のやうな隣の妻君のおいぎなるものを思ひ浮べた。

ペンなき詩人

關本雅幽

『詩はこんなものを言ふのですか』
こんな突拍子もない問ひに度々出會ふ
私は『僕も詩はこんなものか』常に神
經網を張り耳目を澄まして居るのです
と答えておく。もし説明をせんか『あ
うですか』と片付けられてしまふ場合
が多いからである。

僕の友人に努力一貫主義の同僚の信望
を集めて居る〇〇氏がある。曾て僕の子
を病院に見舞つて呉れた事があつた。そ
して以前、君の愛妻が富院に入院、一年
六ヶ月と言ふレコードを残し一日も仕事
を休む事なく夜間門戸の閉鎖を喰つては
横手の塀を乗り越え、病院から出勤し病
院へ歸つた當時を想起して感慨無量の涙
を僕の身に寄せられた。

その後君は親族の懇望を入れて病床に
ある叔父の養子となるべく歸郷されて居

つたがあくまで努力主義を課せらるべき
天運にある君は折角立てられた大阪の家
を引拂ふべく上阪された。早速僕の家を

心ブラにお出での節
は是非お立寄を

緊縮時代に最も適合
した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歓迎いた

します。

南區疊屋町周防町

東入南側

カナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營

訪ねられ『君の悔狀の一節の通り死に面
して眞の養父の姿を拜し得た。仲よく暮
らせの一言は今までの叔父とはさうして

も思へぬ。君なれば一句出來たのに』な
る。今は物質上の問題でなく複雑なる家
業の養家を繼ぐは養父の一言あるのみ
第二の故郷を去るべき決意を聞かされた
僕は唯君の爲め養父に劣らぬ詩を子孫
々に残されん事を祈り此のペン持たぬ詩
人との離別を惜むのである(五、八、二四)

切符の行衛

日野華水

全國中等學校優勝野球大會が甲子園原
頭で開かれた。今日中學對K中學との對
戦中、メンスタンドで此の試合に熱中し
てゐるワイシャツミズボンの男。此の男
の力はH中學の方によせられて居る。試
合は正にクライマックス、第九回目の裏
である。しかも同點一對一。九回の表で
無爲に終つてK中學の決死的の守備であ
る。ワイシャツの男、彼は大聲を擧げた
『打てよ、飛ばせ——』
H中學への聲援である。彼は右手に扇

子ミヲ拭、左手にはカンカン帽を持つて

天下分け目ミ頑張つてゐる。試合は續け

られる。H中學八番打者。バットを捧げ

てボックスに現れる。

『飛ぶぞー飛ぶぞー』

彼は叫んだ。はたして、カーン、バツ

トの響見事遊撃をあて、一壘へセーフ。

『えーぞ、えーぞ、その調子』

彼はわめいた、そしてワイシヤツの腕

をまくつて兩手を振つた。

次の打者九番、うまくバンドして走者

二壘へ一壘アウト。一ダウン、走者二壘

観客は正に手に汗の形。今や甲子園原頭

は静まり嵐の前の静けさの感あり。次の

打者一番、投手の慎重振り、第一球は

見送り。ストライク。第三球目。カーン

『やつたあ』

彼は音ミ同時に云つて、その時少し腰

を浮かした。しばらくそのまゝで見てる

た彼。ボールは中堅までころがり、その

間に二壘の走者一舉に本壘を陥れた。

『ヒュー』

サイレンが響いた、彼は遂に立つた。

『わつしよい〜』

彼のH中學の勝利である。立ち上つた

彼は一生懸命、兩手を振つて踊つてゐる

試合はすんだ。H中學の勝、選手の出

入。グラウンドの手入、次の試合の選手

の練習、しばし場内は騒然たり。

その時、彼は立ち上つて自分の勝掛の

所を一生懸命探してゐる。隣の人が彼に

云つた。

『さないしなはつたんだす』

『いゝえ、落しましてん』

『何んだんねん』

『阪神の歸りの切符だんねん、こゝへ

はさんでおきましてん』

彼はカンカン帽のリボンをおさへた、

隣の人も一緒に探し出した。

『かましまへんわ勝ちましたよつて』

そして彼はそのまゝ探しらせずに次の

試合を見てゐた。

彼は正に野球時代の男である。

無題

河野双車

柳誌の來はじめは川柳雜誌で毎月二十
七八日頃つきます。その頃になるさ僕は
待遠しくて一日十八ヘン位表に出てみま
す。

僕は経験ありませんが、ラブレターの
取やりして青春期を樂しむ若い人の氣持
もこんなものだらうと思つてみたりしま
す。

此の間或る句會に行きましたら或柳人
が『僕は句が出来様が出来まいが抜けて
も抜けてなくても問にしない』一話して
りました。僕は偉いなあ感心しました
そして宅に歸つてから川柳雜誌に毎月一
句づゝ載つてゐる其人の句を見て、も一度
エライなあ感心しました。

アツパツバ

越中今雨

一週間ほご前から京都の姉が子供を連

れて養生に來てゐる。子供には夏虫さか
云ふのが出來、それに胃腸が悪いさか
醫者のすすめもあつたので子煩悩な親は
涼しい——少くとも都會よりは——田舎
へ養生かたぐひに來たのである。
平常は母子二人暮らしの家も俄に殖え
た三人で賑やかな事、お蔭でろくろ落
ち付いて本も讀めぬ有様。そして朝から
晩まで狭い家を我がもの顔でゐる。吐る
には餘りに悲しい。

七年振りで我が家に來た姉の心境を思

川柳書架 (四一)

漫文柳
漫畫

なるほど草紙

矢野錦 渾著

▼目次を覗く左の諸項がある。妻にて候
父上幸あれ、母なればこそ、妻にて候
子供可愛や、金の世の中、酔て如件、
女房同士、温泉場小景、戀をする頃、
嫁姑和合、秘訣、出ものはれもの、大
一座風景、へぼ將棋四十八手、あら目
出度いな、歳晚風景、?の人々、阿鬼
齋句抄、四角四面鏡
昭和五年八月十日發行、三六版二二七

ふ時、姉弟愛以外のものが湧いて來
る。姉のアツパツバの色も褪せてゐる。

何さかなるだらう

丸山 公二

よく人々が自分の力で解決の出來ない
と思ふ場合「何さかなるだらう」ミ、其
焦慮を避けて自分を慰さめて居る。實際
「何さかなるだらう」ミ云ふ言葉は絶望
や悲觀でなく、むしろ樂觀的である。

變轉極りなき社會に棹さして行く僕等
の身邊に起る些細な事柄に拘泥して居た

買定價壹圓五拾錢、發行所東京日本橋
區本石町三ノ一六博文館

▼本書は大眾に悦ばれる書、成程思
はせながら讀過させる點は書名にそむ
かないであらう。

籬の楓

辰己利文 編

▼はしがきを左に……
「まがきのかへで」二巻を編んで、亡き
愛弟を偲ばんとする私も肉身のこゝろ
をくんで故人をめぐる親しきかたが
たりのたむけのくさぐさをばこゝろ
からありがたし思ひます。たゞ故人を
偲ぶこゝろのほかに、今は何物をもも

ら永生ごころか肥える事すら出來ないだ
らう。「何さかなるだらう」ミ洩すのは
心の餘裕を示すものであつて決してなけ
やりなものではないと思ふ。が僕が作句
するのに「何さかなるだらう」ミ云ふ言
葉は無意味な物になつてしまふ。何さな
れば心血を注いだとも云ふ可き句が文字
になつた丈で、生命もなく只文字の羅列
に過ぎないと思ふやうな時には「何さか
なるだらう」ミごころか川柳をやめられな
い以上暗い氣持にさへなる。

たない私さにも、はるかによせられし
なさけごころをおしいたゞきつゝ、こ
の一卷をまごめました。故人のよみの
こした詩歌、俳句、川柳はかぞへきれ
ないくらゐの多數です。しかも故人の
作家としての4活は數年を出でず、全
くの晩學でした。この數年間、一意専
心、斯道のために精進して來ました。
こゝのあゆみのあさをおもつて戴くかたが
たにさゝけたいと思ひます。(以下略)
▼昭和五年九月九日發行、四六版六五頁
非賣品大和國敵傍山東南麓桑風莊刊行
故籬楓辰己利夫君の追悼録で詩人とし
ての同君の面影を遺憾なく傳へてある



本社
柳珍堂忌

本社の中行事、柳珍堂忌は秋氣にはかに忍び寄つて來た新涼句會のトップを切つて、六日の夜催した。當日午後六時頃南區千年町華陽堂病院(會場か二丁計りのところ)から出火して大混雜を極めた爲め、會場附近は一時交通遮斷の厄を蒙つたので途中から引返された方も少なくなかつたのは遺憾であつた。席上、路郎主幹は、主として故人の句の傾向に付て諄々約三分に亘り意義深い講話をせられ、參會者に新たな感激と省察のシヨックを與へられた。

當夜は珍らしく「川柳人」の健吟家河本實果氏が、會場の近くに轉任せられたので來會せられた。散會後門を出づれば、風浙々こし肌をかすめ、期せず故人追慕の感を深うした。(山雨樓記)

いふべくも父が加減おみおつけ
老ぬゝ母伸びし子とたゞ黙す
親不孝らしく見せてる息子の氣
長生の相が嬉しい國の父
交番所親子笑ふて歸るなり
電話口親爺の聲におごかさ
親のこと自慢し合ふて居る子
親が出て親友急にあらたまり
押へつけゝ親の弱りゆく
親になつてゐる友達さまぶう
兒のためにたゞ友のために居る
兒のために生きも男に秋來る
秋の庭親の意見が身にしみる
親と子とせてシホレー何處にく
落椿父はあかるい二階にあ
席題 病院 互
病院へやつぱり春が訪れる
病院さきて小兒は手をはなし
鉢植がはしれ退院ほご近し
病院の廊下でゐる見舞客
病人は既に隣室の死を悟り
腕、足、胴、頭ばらゝに病院で
手術室時計はつきり動いて居
病院夜の電車の音になり
病院で淋しいかと月並な
病院も秋の夜なり秋の夜なり
病院に白い涙の乾きなり
退院をすれ此の大坂を去る氣
病院のうつるすべてが秋の色
病院の婦人倶楽部を讀んで待
病院で預金のことと考へる
同 觀 月
同 弘
同 靖
同 路
同 亂
同 耽
同 愚
同 金
同 山
同 雨
同 綠
同 里
同 公
同 選
同 美
同 點
同 葉
同 平
同 舟
同 孤
同 同
同 櫻
同 一
同 二
同 三
同 果
同 亂
同 耽
同 愚
同 坊
同 茂
同 坊

(天) 輕々と飛んでる夢を見る産後
 (軸) お父さん似て産婦をよるこは
 兼照 腹 卷 路 郎 選
 腹巻に財布のあまり大きくて
 腹巻のお陰にしてる長壽法
 腹巻へ南京豆の殻がつき
 腹巻で一二二のよい教師
 腹巻がダースも編めた令夫人
 父さんの腹巻をして見せに來る
 (人) きつちりと腹巻を友は老け
 (地) 棟梁は腹巻だるう呑んでゐる
 (天) こんなやせで腹巻(手)を入れて
 齊 路 郎 選
 書齊こそまづいが友の温かさ
 書齊とは名ばかりの子澤山
 パーに來て書齊の整理考へる
 講談の本も積んでる書齊に居
 カフエー知つて書齊空しく更へる也
 通されてかけりや書齊を見え氣だ
 書齊もつ身にはあられどむたまし
 (軸) 書齊はいゝがゐた事はなし
 (同) 遠慮して呉れさ書齊へ近付け
 席照 山 路 郎 選
 山の風差別を付けず吹いてくれ
 山肌は薄紫に 春の朝
 山清水飲んで紫に二人居る
 山々々々に爭議も意地もなし
 大都市に近き山よただれ戀に
 (軸) 山の上二人しやが絵にさる
 (同) 山けや唄女のごなすべ出る
 同 路 郎 選
 圓角 多 選
 靈壺 圓角 多 選
 翠夢 圓角 多 選
 靈壺 圓角 多 選
 翠夢 圓角 多 選
 靈壺 圓角 多 選
 翠夢 圓角 多 選

川柳 綴川支部 九月例会 (出雲)

九月六日夜 於緑之助居 伊藤緑之助報 兼題 蟲 緑之助選

こほろぎは脚を残して飛んで逃げ 幸永
何時しかに虫の音聞をゆるがせて 鐵漿
龍の虫露に飢えたる聲になり 琴朗
秋を知りつくして虫の夜毎鳴く 麗亟

愛の巢にゆれる虫籠鳴いてゐる 同
盆踊り谷又谷へこだまして 幸永
誘はれて来る盆踊り人が込み 鐵漿
盆踊り今年も處女を誇るなり 麗亟

失戀の憤みにこゆく暮れる山 幸永
山々が寝た温泉の唄習はう 鐵漿
雲途に山を包んで迫るなり 麗亟

席題 山 鐵漿
月明の中に思へばけになつかし 幸永
行き過ぎて若しや思ふ月明り 鐵漿
月明に歌ひつづけて争議團 麗亟

席題 月 鐵漿
瞑想の横顔へ下女手を仕へ 幸永
横顔をみたる羞恥と眞赤な血 鐵漿
横顔ぶつかつて嬉しい面會 麗亟

川柳離誌社 同
守口支都 納涼句會 (大阪)
八月二十四日 於原寫眞館樓上朝田新水報 互選

席題 徹夜 雨町
徹夜する御用も無いと小言なり 當り矢
夜明しの電氣が消えたベンをおき 雨町

エンザンのひびきを徹夜眠う聞き 新水
徹夜することも知らずに誘はれる 漫中
土曙日を基客徹夜さきめて来る 卯三
酣熱を避けて徹夜の灯にしたる 蒼太

徹夜したこの明方のさわやかに 互選
口笛で元氣に戻る紺紺 尺八寸
口笛へ食事の用意知らされる 當り矢
初恋の散歩口笛ばかり付き 漫中
口笛を聞いて娘は落付けず 雨町
口笛で来る要領のいゝ男 蒼太
戀もなく口笛寒く街を行く 同
口笛に潮満々さ寄せて来る 卯三
入選は口笛吹いて戻つて来 同
口笛に調子の合ふた登山靴 新水
口笛に夜學の歸り寒うなり 同
口笛を止めて驚く記事のあり 同

川柳離誌社 同人句會 (大阪)
天王寺支部 八月十九日 於内藤製作所 須崎豆秋報 互選

兼題 夏やせ 雨町
氣苦勞と別に母親夏をやせ 公二
呂の羽織着て夏やせを氣にして 裸人
夏やせの首も浮いてる薬風呂 海洋人
夏やせが蚊帳の外から目立つなり 豆秋
夏やせの首へまだらな天瓜粉 同
夏やせ静かに蚊を叩く 石竹
夏やせの父の姿を庭に見る 同
夏やせをやる暇もかきぐ 三汀
(佳)涼しきは夏やせの妓の肩の線 同
(佳)涼しきは夏やせの妓の肩の線 同

席題 蟬 石竹
席題 蟬 石竹
席題 蟬 石竹

トンボが又もとの所へ来てとまり 雨町
陽がさしボーフラ忙はしさうに浮き 鵜峯
セキセイの中へトンボを入ておき 裸人
研いだ鎌持つてボーフラ眺めてゐ 同
教室へトンボスギく道入つて来 同
(佳)ボーフラの夫婦ごちそう見 同
(佳)赤トンボを淋しく見る失業者 同
(人)たそがれの蟬鈴の急ぐ雨の空 雨町
(地)水面にトンボ腰をのばして 公二
(天)若いトンボが障子に當り 同
(軸)ボーフラの正しく小雨見て沈む 豆秋
席題 繻帯 互選
繻帯の大きく少しあまへてゐ 裸人
片腕吊つて往來ながめてゐ 公二
繻帯が社長へ會ふと坐り込み 同
恥かしいさこを繻帯してもらひ 同

川柳離誌社 耽柳會句會 (兵庫縣)
加古川支部 八月廿一日 水田篤男報 互選

柿のうまさも秋は更け行く 美也光
蓑笠今朝の座敷にチト淋しく 篤男
亡き母の寫真を出して見るも秋 同
セルの香が去年の秋をチラつかせ 洛陽
失業苦秋の意識に吐息つき 泰山
朝顔の終ひの姿を鶏が踏み 光穂
九月五日 席題 盆 互選
精霊と云ふも父なり母であり 泰山
盆節期安し西風が祟つて来 同
中元を遠慮も無く賞ふ地位 篤男
思ひがけなく娘の姿で盆に来る 同

五

れてゐた。

席題 羨む 井々樓選

羨みをかかくして友を侮りぬ 吉祥

せめてもの派手を近所へ羨まれ 思芥郎

羨むに限り非らじき 茹子漬 山々

一生を羨む秋の日をおぼへ 白山坊

嫁ぐ日を唯いそぐと羨ませ 山々

退屈な眼を遮へ切つて夫婦連 松水

羨みの中に生きているモスの帯 吉祥

(人)羨んでばかり女の一人居る 燕子花

(地)羨望の的へピントが合はさる 亂雨

(天)受話機を黙つて渡す姉藝者 茶撫郎

席題 口ぐせ 茶撫郎選

口ぐせの甘さを子供知つてゐる 吉祥

口ぐせにお金の事もほめかし 山々

口ぐせのやうに女給の悲觀説 燕子花

口ぐせを笑つて姉は居間へ立ち 井々樓

(佳)酔ふとすぐ口癖になる父の疵 青豊

(同)口ぐせで叱る社長へ笑へない 松水

(同)新妻の口ぐせにする唄があり 東風

(同)口ぐせは儲らないさ朝の内 白山坊

(同)うっかりささ出る嫁の里言葉 柳鶴人

(同)考へておく資本家の口ぐせ 松水

(人)口ぐせに只内の人々 燕子花

(地)口ぐせも出る演壇の真剣味 東風

(天)口ぐせに子供は病みつけ 白山坊

(軸)口ぐせを養子今日、里で聞き 茶撫郎

雅幽 居小集 (大阪) 九月二日夜 關本雅幽報 席題 新 佛 五 選

來客に問はれてゐる新佛 綠雨

新佛好きな果物供へられ 山月

こぼろが晝から鳴いて新佛 雅幽

夕飯のまだ賑やほぬ新佛 同路

新佛へ月もし込む虫も鳴く 同路

新佛廻り燈籠に夜も更けて 同路

席題 舊友 互選

ぼんさ肩を叩く舊友の挨拶 綠雨

よく見れば同窓生の車掌なり 信一

彼の女かと舊友ジツト顔を見る よした

見違へた見違へたさ舊友なり 山月

舊友と話もつきす終電車 雅幽

東京に居る消息は僕もき 同路

これ君の子かさ寶塚で會ひ 同路

絲の街 納涼句會 (長野縣) 八月十六日 高峰柳兒報

風通しを褒めてる執達吏 澄麿

暴風雨燈台守へ暮る夜 可醉

トンネルを出て一せいに風を入れ 澄麿

居眠りの子へ風車廻つて 柳兒

(軸)夏の風待つ窓みんな北へ向け 柳兒

冷ビール泡から涼味わいて立ち 柳枝

うまそうなビールの泡の伸す首 仲伊千

牛玉の手にビール壺大き過ぎ 柳兒

晩酌にビールの頃もあり過ぎ 清廣

盆 可醉 柳兒

活況を呈して寺へも迫る盆 柳兒

子の靈に額付く父となりし盆 安丸

(軸)盆踊りかけて虫の音訝へて来る 可醉

赤いこと言つて小作料れざり 柳兒

赤手柄一歩一歩へ他人の眼 安丸

(軸)赤手柄ちと褌きて來て世帯馴れ 柳兒

水泳のうまさ体の艶に見せ 仲伊千

友達が來て水枕邪魔になり 可醉

(軸)氷水持つて冷たく汗もかき 仲伊千

現代の尖端を知る飛行艇 柳枝

洋装をきらつて娘肥つて居る 仲伊千

母となる尖端娘に憤みあり 柳兒

フタイルに娘現代追つて行き 澄麿

通帳に村の世態の影が見へ 柳枝

繁榮を昔に見せる預金帳 安丸

新しい通ひ帳尻依然あり 柳兒

里十九居隅會 (大阪) 永田里十九報

愛嬌もなく價また高し 互選

カーテンの影で愛嬌をまいて 夕鐘

愛嬌の息はづませて話し出し 公二

はがらかに人をそらさぬ笑ひ方 同選

席題 愛嬌 互選

秋風をうけて秋山子のしやんと立ち 夕鐘

秋風の吹く朝顔の残り咲き 公二

秋風の立つ頃伯父は来るさいふ 里十九

秋風に一ハズ簞笥あけてみる 同選

席題 自惚れ 互選

席題 新 佛 五 選

汗流す親にかまらず子供食ひ
素人になつて遠慮がちな聲
遠慮へ夜更の街をト走り
遠慮をしい語言ひ損ね
花嫁は遠慮の上へ箸をとり
遠慮すりや段々辛いことが殖え
遠慮して姑心棒裏で泣き
遠慮した装とも知らず見くびられ
着席に男らしくも無い遠慮
さう遠慮すなとあぐらをかくて見せ
汗はだら／＼こまつて
里歸り遠慮の無いをうれしが
遠慮の目と目が合つた周章でやう
涼み臺遠慮へいつか月が出る
片隅のつて二人のむつまじく
遠慮もせず女給は酒をつぎ
すみつ／＼おれば幹事も呼ばれ
押しやつた座蒲團をまたすきり
一日を遠慮に暮れて肩が凝り

佳句

格子樓 黒天子 鰯山 朝陽 涼哉 同喜 喜彦 鳴玉 同多 同聞 一杉 同雨 同ひろし 同峰 彩子 格子樓 白夕 竹石 多聞 青砂 同美 同曉 路夏 同郎

(天)遠慮して語る心に夜を更かし
(軸)泊まるのを遠慮の妻は袖を引
花火 三ツ子の目を丸く花火會
背の子が又振り向いた花火なり
花火からもまれ／＼て驛に出る
打揚げの花火ウアーの聲でほめ
花火から見ればみんなは釣られ
手まねでは出来ぬ花火を見て戻り
大層根が邪覺して花火あがの音
汗入れて花火へ好きなら浴衣着る
落ちてくる花火人形竿でとり
打上げる花火に猪口は飛んで行き
ビールを言ひに花火の下を行き
子をねむらそまいと花火の空を
尺玉の偉大なことをしらしめる
打揚げの花火に子供抱きなをし
花火／＼空を眞赤にしてしま
氣を變へて花火へ立つた四疊半
起きもせず食花火を見るなり
養生の花火に戀し都の灯
星影も失せて花火は盛なり
その花火のんきな父さの鼻の先
船頭は花火へ尻をむけて立ち
妾を連れて花火大會
花火嬉しく背の子の動くこと
消え失せる花火惜しむにあらね
わけも無く花火に汗の流れ
横町の犬は花火に吠ひつゞけ
最後まで花火はハセル意氣を見せ
人間へ花火はハセル役を持ち

曙水 琴人 山選 山彦 竹居 竹石 飄山 喜彦 喜人 翠山 黒天子 同雨 同峰 同美 同喜 同彦 同路 同郎 同青 同砂 同美 同曉 同格 同山 同茶 同花

バツト散る花火に戀のくづれ来る
酔ふた眼が仕掛花火にさめて来る
漕きやめて流れた舟に遠花火
もう花火上る頃かと窓に顔
兼題 西瓜 路郎
西瓜食ふさきも娘は娘なり
西瓜番蚊の鳴く聲を聞いてある
遠慮してある間に西瓜横ごられ
湯上りの西瓜涼しふ見て戻り
西瓜食ふたびに名の出る我が齒
西瓜切るに兒等は黙々眺らんで
佛前に水引かけた西瓜あり
西瓜小屋に近づいて来る誘蛾灯
西瓜は赤し水の賣れること
好い盆へ西瓜ニタ船のせられる
西瓜畑親父案山子のやうに見え
看板に赤う書いてる西瓜なり
中元の西瓜風呂敷敷こころげ
叩かれて提げられて西瓜値がき
ラゲビーの様に西瓜を運んで
三ヶ月の様に西瓜の皮を捨て
冷へぬ間に西瓜はしまひなり
西瓜は西瓜、クリーム二つ食ひ
西瓜賣水で流した事も言ひ
(人)松虫と並べて西瓜灯さ
(同)西瓜まる／＼山遠き朝
(同)生駒の灯遠く眺めて西瓜番
(地)里からの西瓜は繩で高手小手
(同)一里餘を父は西瓜を持つて
(天)客へ出す西瓜言譯ばかりする
(軸)西瓜提灯君怪談話さうか

(以下次號)

ひろし 同水 同路 同選 格子樓 琴人 樹光 壽枝 紫水 涼哉 白夕 緑雨 史山 同彦 同喜 同山 同峰 同彩 同同 同青 同砂 同美 同曉 同格 同山 同茶 同花



編輯後記

路郎生

▼句の秋だ。詩人の秋の呼吸がこれからはつきりとうかがはれると思うと愉快だ。秋の空を見上げると、ざくろが、無花果が詩人の眼を奪う。

▼前號で目次を二頁にしたこと巻頭に「柳翁と柄井家」を書いたこと、等々の苦心を買ってくれた人たちから、毎號巻頭へ短いのを書けといふ注文も出たこれは絶えず書く、書かでものを書くやうになり易いので一考することにした。尤もいんな形で諸君の期待に副う積りだ。

▼真面目な社友の希望者が殖えて来た。いゝことだと思つてゐる。

▼好評だった山雨樓君の「主観句の研究」も本號で完結した。ひろし君選の近作二部にはひろし君の短評をつけることにした

毎號のことであるから相當に骨が折れやうとは思ふが、なるべく簡単に要點、焦點と云つたところを見つけて書けば、作者にも讀者にも益する點が多からうと思ふ。

▼蛭子氏の「竹馬居雜筆」は研究心の足らぬ柳人にとつて一大痛棒であらう。倦まざる努力と其の豊富なる蘊蓄に對しては何人と雖敬意を拂はない人はないだらう。

▼拙稿「旅のころ」は、ホントは一年位書きつゞけたいと思つてゐたのだが、他の原稿の都合で、そうもならないから、愈に本號で打切ることにした。東京のこと、平塚のことなどは、そのため筆にすることが出来なかつた。北海道のことも、川柳以外の事を、もつと詳しく書きたかつたのであるが誌面のない月

刊雜誌に、そうした方面を書くことの不可能を思ふてすべてカットしてしまつた。従つてカットの多い映畫のやうに、拙い原稿がます／＼拙いものになつてしまつた。「柳壇の人々」も續稿を掲げたいと思つてゐたが、同じ題目ばかりつゞくので、「旅のころ」の方を先に片づけることにした。

▼不朽洞の大掃除が九月四日に行はれた。この日から僕は階下の表六疊に移つた。親のスネがぢり時代、二階借時代、居候時代は勿論のこと、一家の小さな主となつても階上でなければ落着けなかつた僕が、階下に自分の部屋を持つことは僕的生活様式の上に非常な革命である。

▼柳珍堂忌の句會の晩、端の坊のすぐ横の病院から火を發したため會場が非常警戒線で遮へざられた出席者はその非常線を突破した勇敢な人々だつた。「川柳」を解して呉れた巡査さ、解して呉れない巡査さがあつたため、出席者は半減された。

▼月評會を十日の夜、里十九居で開く。出席者は、紋太、ひろし、琴人、山雨樓、町二、愚陀の諸君と僕の七人。愚陀君が例によつて筆記の勞をとつて呉れた。

▼十三日の夜神戸支部の會へ出席した。大阪からは、ひろしかほる、雨町の諸君が出席した魚崎の亂歌君も来た。僕は一年振りの出席だつた。満洲四平街にゐた舊知森牛疊君が出席した。先月の青明忌にも出席して僕をたづねて呉れたんだそうだが、僕が不参をしたので會へなかつたのだ。森君は常分神戸のために談してゐるから支部のために盡してゐるだらう。僕は「ヒューズはあまりに現實な」といふ題で川柳詩に關する感想を語つた。會は盛會だつた。十時半散會。散會後、席をあらためて、支部の二南、華水、市公、凡骨、××の諸君と川柳に就いて談び十二時半支部會を閉ち、私は支部で泊つた。神戸支部は又々動きはじめた。青年インテリゲンチヤの集りだけに將來を大いに期待してゐるだらう。

▼十六日の夜は至誠川柳の會であつたが、僕はコントシヤとして眼に陥つてゐた。十七日になつても氣付かなかつた。それほど疲れてゐたのだ。至誠會は十五日に變更された。十五日だと思つてゐると十六日に變更されたけれども忘れてゐなかつたのだが、あまりに深い眼が意外な迷惑をかけることを恐縮してゐる。

る。實は十三日の神戸の會、十四日の編輯、十五日の紀州粉河寺に於ける桃谷家の葬儀へと東西に飛び舞はつてゐた僕は疲勞のために十六日からコントンの眼に陥つてゐたのだ。その後も眠むる以外に何ものもないありきである。つゞきならぬ原稿をかくと眠つてゐる。選をすると眠つてゐる。そしてこの次に來る眠むれない夜を怖れてゐる。

▼故辰己藤楓君の追悼録「籬の風」を實兄辰己利文氏から贈られた。亡き令弟を思ふあまりになつたもので、讀んでゐる涙が流れて來る。令兄辰己利文氏は奈良文化の研究者として知られてゐる。

▼九月の例会を繰上げて八月三十一日の午後から御旅支部の會で摩耶山の天幕村へ出かけた。テントが満足だつたので少し上方の摩耶花壇の階上の一室を借りて旬三昧に入る。大阪港が窓下に横はつてゐる。爽涼の氣が部屋に充ちてツイシャツ丈では寒い位。出席者は圓角、翠夢、多郎、靈靈の常連と僕を加へて五人。日没後靈靈と分れ一行は神戸まで自動車飛ばす。食後、元アラをやり、それから紋太居を訪れた。

創作懸賞川柳

募集の言葉

▼一時、流れの身なんでもものといふ言葉が流行つたが、川柳路は徹底的にさすりの旅にある最近に蒙古の鄭家屯からたよりをよこした。四ヶ街満鐵本線から奥へ三百哩の蒙古の鄭家屯と

川柳の社會化運動といふことが徹底的に解つてゐないためにある人々を感違ひさせ、大衆に媚びることによつて、作品の低下を招来しつゝあります。これでは從來の誤られたる川柳觀に屋上屋を架するもので、心ある者の默視するに忍びないところであります。

本社に茲に見るところあり、弘く社會より、より良き作家のより良き作品を募つて、創作獎勵の範たらしめんと左記の賞品又は記念品を贈呈することにいたしました。奮つて應募されんことを切望いたします。

云ふ所へ來て居ます。蒙古軍の師團本部のある箇所なれども兵隊はすぐ馬賊と早變りする實に物騒極まる土地で、夜間の外出は絶對禁物、夜毎に銃聲が聞えるのでビク／＼して麻雀も手に

つかず、チャンチュー(支那酒)の強いのをかりて布圍へもぐり込む格好は支那人に笑はれる位日鮮人の醫者は蒙古に非常に多い。それは支那の醫術が幼稚な故で、漢法醫ばかりの蒙古では

課題 「喜び」

選者 麻生路郎氏

賞 一等貯蓄債券(拾圓券) 二等同 (五圓券)

三等川柳雜誌(壹年分) 佳作若干名記念品贈呈

句數

一枚五句以内(但一人にて幾枚投するも可)

用紙

「川柳雜誌」十月號より每號添附の投句用紙に限る

締切

昭和五年十二月五日限

發表

昭和六年新春特輯號

投句所

大阪市住吉區住吉町六〇三 川柳雜誌社内 創作獎勵懸賞川柳係宛

日本の藥屋さんなどは立派に醫者を開業して信用を得て居る状態です。物價の安い事は非常なものです。食物では豚肉、牛肉、鳥肉は一斤八錢前後、卵は一個五厘、砂糖も一斤十二錢、割合

に膏物は高い。毎日肉食ばかりで齒を痛めて閉口。飯が赤いのを調べるさ、白米でも黄色になるのは非常に井戸水が悪く、石鹼の泡が立たぬほど鐵分多し、石は又閉口。有名な蒙古風は砂を吹き上げ舞ひ風が度々起り、飛行眼鏡をかけぬと歩行が困難です。一寸珍らしいのは葬式と結婚の行列、今日觀た結婚行進の音楽曲に、日本の軍艦マチをビビビ吹いて街を練つてゐたのには苦笑しました。そして村田銃を提げた兵隊が帽子を上向き(アミダ)に冠り眞面目くさつて後ろへぞろ／＼ついて行くありさまは支那の奥地でなければ觀られぬ光景です」云々

▼安藤幻怪坊、岡田三面子共著「謡曲と川柳」を春陽堂から、岸本水府著「川柳手習」を同君から惠贈をうけた。目下校正中なので次號「川柳書架」で重れて紹介せう。

▼宮尾しげを君編の「小嘶再度目見得」第一冊が出た。申込は東京府下西果嶋町宮仲一九六二同君宛

▼出口雨町君が「大正日日柳壇」を擔任した。厩は新聞に掲げられてゐる。維吟も募つてゐる。句數は無制限だ、投句は大阪市西成區千本通五ノ七、川柳雜誌社内出口雨町君宛。

川柳雜誌第七卷第十號（通卷第八十一號）附錄 昭和五年十月一日

切取 綴

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社內

創作
獎勵
懸賞
川柳
係

郵便はき



川柳雜誌【第壹回】懸賞川柳投句用紙

(内以句五數句)

住
所

氏
名

(没は反違定規)

投稿規定

▼近作柳樟及課
題の句稿は
葉書又は同型
の厚紙に各題
別紙に認め、
住所氏名雅號
を明記するこ
と。

▼近作柳樟は一
部又は二部の
いづれかを明
記する事。

▼各地會報は半
紙判の原稿紙
に清記のこと。

▼文章は二十字
紙半紙判原稿
紙に認めるこ
と。

▼書體はなるべ
く楷書「川柳
雜誌原稿」を
封筒に朱記す
ること。

▼締切は嚴守さ
れたし。

▼投稿其他につ
き御問合せはす
べて返信料封
入のこと。

募 集

第七卷第十二號課題

十月五日締切
(各題十句以内)

- ▼鐵 森 中野 東 魚 選
- ▼奧 水谷 鮎 美 共 選
- ▼失 阿部 閑 生 共 選

第八卷第一號課題

十一月五日締切
(各題十句以内)

- ▼初 雪 川上 三太郎 選
- ▼小 鳥 麻生 葦乃 選
- ▼伊藤 綠之助 共 選
- ▼中見 光路 共 選

每 號 募 集

- ▼近作柳樟 (一部) 十句以内
麻生 路 郎 選
- ▼近作柳樟 (二部) 十五句以内
安井 ひろし 選
- ▼近作柳樟の一部と二部へ同一人で
投句することは御遠慮ありたし。
- ▼各地柳壇 (會報)
- ▼文章 (評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切 (編輯に關する件、投句、購讀
廣告) の用件は下記川柳雜誌社事務
所宛に願ひます。

價 定

普通通號 一部 金參拾錢
新春特輯號 一部 金五拾錢
八月特輯號 一部 金四拾錢
半箇年前金 (特輯號共) 壹圓八拾錢
壹箇年前金 (特輯號共) 壹圓八拾錢

料 告 廣

本誌への廣告に就き
ましては本社へ直接
御一報下さいます
ば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確
實であります▼諸代受領は送金によつて御承知願ひます▼送本封紙
に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金
郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便
(一年分) には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には
何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して
御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年 九月廿五日印刷
昭和五年 十月 一日發行

第七卷第十號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸 二 郎
發 行 所 大阪市西成區千本通五丁目七番地 柳 雜 誌 社

事 務 所 大阪市住吉區杭全町六〇三番地 柳 雜 誌 社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番
電話天下茶屋二五七九番

店書捌賣 (大阪) 大賣捌 二盛社書店 (明文堂 其他 市内 各書店)
(東京 仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、後藤、寶文館 (願館)
石塚 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎

川柳雜誌社關係人々

贊助員

池澤樂居 大田弘雄 岡本平 片岡直方 嘉納純 田中辰二 長崎柳秀 藤村史郎 藤本卯之助 赤井清一 末弘嚴太郎 伊藤藤彦 大島濤明

岡田三子 川上三太郎 川村花菱 吉岡鳥平 吉田清 窪田銀波 安川久美 前田雀郎 小出楯重 柴谷柴舟 篠原春雨 蛭子省二 森元東太 相元紋太 伊藤友夢

池田雪峰 石川雙葉 西田草樂 西村明珠 友村貴山 喜多春月 辻左馬 永里十九 中原圭二 中川めかく子 中野柳陽 中澤濁 中見錦水 上野見錦 桑原京郎 松村敏郎 松田多郎

山本凡々 山本雨迷 山口藤寺 山位公柳 増山黃蛾 丸山公柳 熊川洲馬 楊井二南 越井久水 淺井冷水 安西杏三 阿形一杉 阿井閑生 北井圓角 木山青砂 水田光穂 三輪夏曉 松田多郎

白井梅里 平井蒼太 日野華水 森石竹秋 須崎豆秋 同 伊藤綠之助 伊藤素路 岩崎柳路 岩崎素路 伊藤愚陀 原藤史風 長谷川徹 太田朝陽 小川三猿堂 龜井花童子 高橋かほる 竹内多聞 麻生路郎

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 万よし

金澤支部(金澤市)幹事中川めかく子

堺支部(堺市)幹事友淵 貴山

天満支部(大阪市)幹事北山 悟郎

田邊支部(和歌山)幹事辻 左馬

松山支部(松山市)幹事岩本 素人

濱寺支部(大阪府)幹事太田 朝陽

鏡川支部(島根縣)幹事伊藤藤之助

守口支部(大阪府)幹事朝田 新水

神戸支部(神戸市)幹事楊井 二南

豊橋支部(愛知縣)幹事白井 梅里

御旅支部(大阪府)幹事櫻井 圓角

山口支部(山口縣)幹事柳川 洲馬

平綴支部(神奈川)幹事酒井 駒人

高岡支部(富山縣)幹事越田 久水

函館支部(函館市)幹事龜井 花童子

加古川支部(兵庫縣)幹事水田 光穂

天王寺支部(大阪府)幹事須崎 豆秋

高知支部(高知市)幹事中澤 獨水

京都支部(京都市)幹事桑原 京郎

平野支部(大阪府)幹事熊本 黄蛾

梅田支部(大阪市)幹事水谷 鮎美

鳥取支部(鳥取市)幹事中島 鐵洲

鶴町支部(大阪府)幹事關本 雅幽

盤ヶ池支部(大阪府)幹事田中 紫浪

別府支部(別府市)幹事小川 三猿堂

小松支部(石川縣)幹事上野 錦水

道アラから

公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石なごのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にまつては有難いことだ。安い本をもつて安く読む方法としては古本を買へばいい。古本に云つても虫食本のことはではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎた。道アラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすすめしたい。(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈ります。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

內容概目

川柳 累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありまし

川柳 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入 定價一圓（送料拾錢）

麻生 路郎 著

川柳漫談

價壹圓五拾錢
送料 拾八錢

西原 柳雨 著

川柳江戸歌舞伎

價參圓五拾錢
送料 拾八錢

岡田 三面 著

寛政と柳樽の改版
改革と

價貳圓五拾錢
送料 拾八錢

同

川柳江戸名物

價貳圓五拾錢
送料 拾貳錢

同

隨筆 虛心觀

價貳圓參拾錢
送料 拾八錢

同

川柳吉原志

價四圓八拾錢
送料 拾八錢

今井 卯木 著

俳風 柳多留拾遺

價貳圓 拾八錢
送料 拾八錢

同

川柳風俗志

價參圓八拾錢
送料 拾八錢

川上 三太郎 編

新川柳壹萬句集

價壹圓五拾錢
送料 拾錢

武笠 山椒 著

俳風柳樽通釋

三卷各卷參圓
各送料拾八錢

同

川柳滑稽句集

價九拾錢
送料 八錢

谷脇 素文 編

川柳 漫畫いのちの洗濯

價壹圓八拾錢
送料 拾二錢

近藤 館山 坊 編

新川柳類壹萬句

價壹圓五拾錢
送料 拾錢

柳書取次

御注文は前金の事

大阪文藝社

大阪西區成田五七番

電話 天大 下大 茶三 屋三 二九 番九 番七

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年九月廿五日印刷本 昭和五年十月一日發行

川柳雜誌

（第八十一號）

定價金三拾錢